

るのである、されば如何なる時代でも偉人の思想行動の下には總ての個人が摺伏するのを常とする、偉人が作出形成せる社會概性社會概能の後塵を拜して凡人は僅かに追隨して行くに過ぎぬ、併し古來曾て未だ眞の偉人なるものが發現したことがない、たとへば釋迦孔子、基督の如きも偉人と稱さるゝが成る程思想の上に於て相應に偉大な所はあつたにしても其行動に於ては決して偉大といふことは出來ぬ、彼等の思想に依つて社會概性社會概能が形成されたとしても彼等自身は之れを事實の上に具現するに至つて居らぬ、またアレクサンドルやナポレオンも偉人と稱さるゝが成る程其行動は確かに超凡な所があり、また彼等に依つて社會概性社會概能が形成されたとしても思想として甚だ淺薄なものである、爰に偉人といふは思想と行動とが一致しなければならぬと同時に思想が社會概性社會概能

を作出形成し同時に行動が社會概性社會概能を作出形成するものでなければならぬ、即ち聖人であつて英雄を兼ねるもの、英雄であつて聖人を兼ねるものでなければならぬ、過去時代の人物を例に取るならば釋迦、孔子、基督等の如き思想を有して而してアレクサンドル、ナポレオンの如き行動を取るものでなければならぬ、唯だ併し是等は過去を標準とする、されば現代及び現代以後の時代には釋迦、孔子、基督、アレクサンドル、ナポレオンを兼ねたるのみでは以て偉人と稱することは難い、少くとも釋迦、孔子、基督以上の大思想を有し、而してアレクサンドル、ナポレオン以上の大行動を取るものでなければならぬ、現下時代の要求する所は過去世代の典型を超脱したる新しき眞の大偉人である、これ時代の要求なるのみならず宇宙が將さに實現せんとしつゝある所のものである、誰人



か此時代の要求に應ずるものぞ、誰人が此宇宙の實現に適ふものぞ、全眞至上の太靈道は當さに此時代の要求に應じ宇宙の實現に適ひ日本の國土に發現せるものであつて、太靈道主元は實に此大思想大行動を理想として之れが具現完成に努力しつゝあるものである、普ねく總ての社會概性社會概能は太靈道に依つて作出形成され時勢は太靈道に依つて發現するのである、而して總ての個人にも亦た偉人性は本來具有せるものである、唯だ近代の物質主義個人主義は偶々各個人の偉人性を滅却し去つて居るのであるが、今や太靈道の光輝に浴し其本來具有の偉人性を發揚すべきである、斯くして社會概性社會概能は自ら之れを作出形成し、時勢は我れより生ずるに至らしめなければならぬ、要するに社會の根抵には社會概性社會概能なるものが存在し、而して之れを徹觀すること誰人も肝要なると同時に、

各個人は自ら本有の偉人性を發揮して此社會概性社會概能を作出し時勢を生せしむべきである、太靈道に在つては主元自ら之れが具現完成に努力し世衆を導て此境に至らしむることを大趣旨として居るのである、世衆須らく發奮激勵すべきである。

#### 四、社會は時間空間を通徹して至全性能を有するものなることを理會す。

世は澆季になれりと云ひ末世に近しと稱せらるゝこと既に數千年以來のことである、人類歴史の始めより世は澆季であり末世であるのである、然らば現代の如きは誠に澆季の上の澆季、末世の次ぎの末世たるべきである、而して社會は進歩せりと云ひ發達せりと稱せ



らる、澆季末世と進歩發達と全く相矛盾するのであるが孰れが眞であるであらうか、或は精神的には澆季末世で物質的には進歩發達せりと觀察すればよいのであらうか、更らに又た人類は理想黄金の時代に向つて進みつゝありとも稱へられ其半面には事實上人類は一個の勞作器械として存在するに過ぎざるの觀がある、澆季末世と、進歩發達と、理想黄金境と勞作器械とは是れ等を綜合一括して考慮するの時吾等は果して何物を發見し得るのであらうか。

思ふに社會といふものは過去に在りては如何なる時代でも完全なりとせられた社會は未だ曾て存在せず、現代に至りても亦た完全なる社會と云ふことは固より不可能である、是れと同時に將來に向つては或は思想家の一部が想像する様に理想的時代があるかといふとこれまた容易に斷定し難いのである、併し社會の完全不完全を論ず

る前に先づ社會は如何なる處に立脚して居るかを觀察するの要がある、社會は時間的關係と空間的關係とを離れては無論成立するものでない、他の一切の事物も時間空間の關係を離るゝことは絶対に不可能であるが、殊に社會觀察に於ては一層時間空間の關係が必要を感ずる、然るに世人の多くは社會とは個人の聚合團體であるといふことを考へる迄で此大切な時間空間の觀念を除外して居る、隨て社會の生命といふものを認めて居らぬのが多い、けれども社會には社會としての生命を有して居るのであつて、その生命は言ふまでもなく時間空間に繋つて居るのである、即ち人類社會は地球の表面といへる空間に於て元始時代より最終時代に至る所の時間に亘つて存在して居る處の大生命である、個人は死滅しても人類社會は元始以來一瞬一秒時と雖未だ曾て其生命現象を休止したことがない、現在



も元始以來一貫せる社會生命を有し現在以後も亦た一貫せる社會生命を有するものである、此元始より現在に、現在より最終に連亘して一貫せる人類社會の生命現象を観察すると少なくとも時間的に進歩發達しつゝあるものなることを思はなければならぬ、これ總ての生命現象は發生し發育し成熟し終滅するといふ原則の上から社會生命も亦た此原則を逸脱することなく元始時代に發生し現代迄發育し來り繼がて成熟し遂に終滅するに至るの道程を取ること明瞭であるからである、而して今は將さに發育成熟の途中に在るものである、個人にしても嬰兒、少年、成年、老熟の期あるが如く社會も亦た此順序を経るものであつて遂に老熟期に入るのである、併し成年又は老熟の時期を以て直ちに理想境であり完全世界であると言ふことは出來ぬ、完全といふは單に或る一時期を限つて現るゝものではない、

また或る空間のみを限つて現るゝものではない、即ち時間的空間的に連続して居る所の相關關係全部を指して觀察しなければならぬ、たとへば個人は成年期老熟期が完全期であるかといふとそれを成熟期とは云ひ得るも完全期とは言ひ難い、何となれば個人は發生から終滅までが個人としての完全なるものであつて、單に成熟したる一時期のみでは事實完全でないからである、嬰兒の時期、少年の時期を取り除き成熟期のみを完全といふは事實上言ひ得ないと同様に、社會も亦た將來の成熟期が完全期であるとは言ひ得ない、即ち完全なる時期と云ふものは全然あるべきものではないのであつて彼の理想境を夢みるものは畢竟此社會の成熟期を指して居るに過ぎないのである、又た空間的にも或る一地方に於ける社會のみが完全となる様のことは絶對にあるものでない、要するに社會の完全とは時間的



には社會發現の元始より社會絶滅の最終に至る總てを通過し空間的には地球上人類の生息する總ての場所を通過し、此時間的に空間的に通過したる社會を一個大生命現象として觀察し、此大生命全體としてのみ完全なるものであつて、其一時期を劃し又は一地方を限れる所に如何なる成熟的社會が現出してもそれは以て完全であるとは言ひ得ぬ、併し唯だ總ては完全の一部であると言ふことは出來得る、即ち時間的には現代も完全の一部分であり、元始時代も完全の一部分であり、澆季末世と稱せられたる時代も完全の一部分であり、而して後來の成熟期も亦た完全の一部分である、更らに空間的には日本の社會のみでは如何に發達しても完全とは云ひ難い、歐米の社會のみでも亦た如何に發達しても以て完全とは云ひ難く、日本、歐米、是等全體を通過して總てが完全であると同時に、日本の社會も歐米

の社會も共に完全の一部であるとは云ひ得る、即ち社會は時間空間を通過して至全性能を有するものであつて、單に一時期一地方の社會は以て全體としての完全ではなく、それは單に時間的乃至空間的に完全の一部であるといふに過ぎぬのである、之れを以て現代が澆季でもなければ末世でもなければ將た又た理想境でもなく、社會は時間的に將た空間的に、精神的に將や物質的に一個の大生命として完全なるものであつて、各時代各地方の社會は此完全生命の一部分であるのである、されば將來の或る時期に理想完全の社會が現出するといふの思想は容認し能はざることとなる、隨て人類は過去も現在も未來も東洋も西洋も精神的文明も物質的文明もみな是れ悉く完全大生命の一部分なりといふ思想を理解し、決して現代が不完全であると思はざるを要とするのである、完全に對しては勿論不完全であ



るが併し徹底的に不完全と云ふ類でなく完全の一部であるが故に一部のみにては全體としては不完全であると云ふに過ぎぬ。  
 凡そ一切の事物は單に一部のみを観察せずして先づ須らく其全體を観察するの必要がある、全體に於て完全なるものも一部としては不完全であり、一部として不完全なるものも全體に於ては完全となるのであつて、前來述ぶるが如く社會は時間空間を通過してこそ完全である所謂至全性能を有するのである、その至全性能の發現が各部分の社會を爲して居る、されば各部分の社會も時間空間を通過せる社會大生命に繋つて居るものなることを理解すべきである。

五、社會の發動は總て靈機的なることを理會す。

社會は宇宙凡總事物性能活現發動の絶對形式であつて、宇宙間の社會中、人類社會は至上性能の發現であり、而して社會の根柢には社會概性社會概能なるものあり、且つ社會は時間空間を通過して至全性能を有するものなること上來叙述するが如くである、而して此社會は全體として一個の大生命なること又た前項に示せる如くである、併も此大生命たる社會は如何にして發動するものなるかといふに、そは實に無機有機を超越したる靈機的發動であるのである、靈機的なる熟語は全然耳新しく一般人には理解し難きやも計られずと雖、茲に靈機的發動を説明するに先だち少くとも社會が無機體なるや將た有機體なるや又は有機體以上なるやを決定する必要がある、社會學者の間には社會は無機體にして、有機體たる人類の聚合團會に依り其發動恰も有機的に觀察され易きも事實に於て社會は無機的



發動を爲すものにして、有機的人類を取除く時はまた社會の存在を認め難きを以て見るも社會有機體説の誤れるを知るを得ると説き、之に對し社會有機體論者は個人は固より有機體であるが社會の發動も亦た全く有機的であつて決して之れを無機體視するを得ず、既に社會を構成する個人が有機體である以上、其構成されたる社會も亦た有機體たること勿論である、是等無機説有機説に對し有機體以上であると説く學者もある、併し此有機體以上といふに就ては甚だ明瞭でない所もあるが、要點としては社會は無機體でないは勿論であつてまた普通云ふ所の有機體の如き實質のものでなく、眞に有機體以上の發動を爲して居るものであると説くのであるが、是等無機有機、有機以上の各説中何れが眞であるであらうか。

社會は固より之れを無機體であるとは云ひ得ぬ、何となれば無機

體といふ實體が何處にも發見することが出来ぬからである、個人といふ有機體を取り除いて後に有機體が残らぬから無機體であるといふならば、個人と云ふ有機體を取り除て無機體といふものも残らぬのである、有機體も無機體も残らぬのにそれを有機體でなく無機體であるといふことは理論上解し易らざることである、隨て社會無機體説は之れを否定せざるを得ないこととなる、次に社會有機體説に於て個人といふ有機體に依つて構成せらるゝ社會は矢張り有機體であるといふのは、無機體説に比し稍進みたる思想なれども而も構成の原因體が有機體であるからとて其構成せられたる結果體即ち社會が直ちに人類同様の有機體であるといふことは事實の上に於て是認し難いのである、於茲乎社會有機體説も之れを是認すること能はざる所である、次に社會は有機體以上であるとの説は全く無機體有機



體兩説の缺點を認めて稍々超越的に説いて居るの傾向はあれども、單に有機體以上であるといふのみにては果して如何なる實體のものなるやを了解し難きこととなるのである。是等の説も亦た以て完説とは言ひ難いのである。さらば社會の實體は果して如何なるものであるであらうか。

社會とは單に結社會同したといふが如き約束的意味のものでないことを先づ第一に知らなければならぬ。勿論個人が聚合したといふが如き單純なものではない、假りに結社會同聚合したものに過ぎぬとしても、その結社會同聚合するに就ては決して個人各自の任意的なものではなく寧ろ必然的に結社會同聚合しなければならぬ所の自然の理法が發動して居るのである。人類は元來社會的動物であつて社會を構成するといふことは人類の天賦の性能である。更らに一層廣

き意味に於て言へば宇宙そのもの萬有そのものが社會的發現であつて、人類も亦た宇宙と其揆を一にして居ることを言ひ得る。此宇宙萬有と其揆を一にせる必然的に社會を構成せざるべからざる自然の理法は抑も何によりて發現し來るであらうか、社會學上二人以上の人間の聚合は之れを社會と認める、そこで夫婦といふ結合されたる二人の男女は之れを社會といふことを得る、少なくとも小社會である、併し夫婦は約束的であるけれども約束的なる夫婦を構成するの原動力となるべき性慾は決して約束的でなく全く必然的である、此必然的自然的である性慾を根據として構成せられたる夫婦といふ小社會の間に始めて個人は發生するのである、個人は單獨なる個人であるけれども其發生の原因は社會的である、即ち如何なる個人でも既に懐胎出生の時より社會的連鎖を有して居るのである、たとへ個



人其ものが謂ゆる出家遁世して全然没交渉となるとしても、其個人は既に社會的に出生發現したるものであつて見れば、絶対に社會的連鎖を斷つといふことは全く不可能である、たとへ死しても生れたといふ事實、社會的關係によつて生れたといふ事實は取消すことは出来ぬ、斯くの如く有らゆる個人は何れも社會的に發現出生して居るものであつて、絶対單獨といふことは事實上ないのである、即ち人類の社會的動物たることは全く必然的自然的であるのである。茲に人間が社會的本性を有するは全く必然的自然的であるといふ點に就ては實に甚大なる問題が伏在して居るのである、それは社會が無機的であるか有機的であるか將た有機以上であるかといふことの斷案は茲より生ずるからである、社會の單位は先づ之れを夫婦或は結合されたる二個の男女に置かなければならぬ、而して此男女夫婦

といふものは如何にして發現したるものなるかを究むるの要がある、此夫婦男女と云へる小社會發現の原因を明かにする時は人類社會と云へる大社會の實體をも自ら判然たらしむることを得るに至るのである、然らば男女夫婦と云へる小社會は果して何によりて發現し來れるものなるか、思ふに人類は必ずや宇宙と同時に發現したるものではなく、宇宙成形後或る機會に於て發現したるものであつて、其人類が男女兩性に分たれて居て此兩性が夫婦關係を生ずるに至るのであるが、夫婦となるべき男女兩性は如何にして發現したかを究むれば以て小社會構成の根源を知ることを得るのであると同時に、之れを推して考ふる時は即ち大社會構成の根源をも知り得るに至るべき理である、そこで男女兩性は如何にして發現したかといふと全く靈機的であるといふことが言へる、此靈機に依つて男女兩性が發



生したものであつて言はゞ男女兩性の發生以前に既に此靈機が存在發動して居る、されば男女の小社會發現以前に小社會を發現せしむべき靈機が存在發動するといふとは前々項に述べた社會概性社會概能が既に社會現象發生以前に存在發動して居るといふのと其意味が通じて居るのであつて、要するに社會發現以前に靈機に依つて社會概性社會概能が存在發動して居るのである、換言せば元々始の時代に於て男女未發の際その男女を發生せしむべき靈機が存在發動して居たのである、畢竟男女といへる小社會發生以前に既に社會的靈機が存在發動して居たのである、男女の發生よりも社會的靈機の方が先きに存動するのである、之れを男女といへる小社會に於て斯く云ハ得ると同時に更らに之れを大社會に擴充して論ずる時は大社會發現の以前に於て社會的靈機の存在發動せるものなることを認め得らる

ゝに至るのである、而して此社會靈機は單純なる無機的發動でもなく又た有機的發動でもなく無機有機を超越したる眞の靈機であるのである、靈機とは要するに無機有機を超越して而して無機有機の根源を爲すものたるの謂である、されば社會の發動は其根本に於て眞に靈機的であり、社會發現以前に於て此靈機發動し、靈機の發動に依つて始めて社會の發現を見たものであつて、現社會に於ても此靈機の發動によりて社會は存在するのである、若し靈機の發動を除外したならば遂に社會といふものは空無に終るのである、丁度社會無機體論者が論ずる様に個人を除けば社會は無となるといふ説の正反對になつて、靈機を除けば社會も個人も空無となるのである、社會構成の要素は個人であるけれども社會發現の根源は個人にあらず、また社會そのものにあらずして誠に此靈機に在るのである、社會發



現の根源が靈機に在るが如く現社會發動の状態も亦靈機的である、即ち靈機の發動する所に社會的現象の種々相が生ずるのであつて、是等は一々事實に就て考究する時は益々社會が靈機的實體であることを知り得るに至るのである、於爰乎社會に處するものは先づ須らく靈機的觀察を爲し而して靈機的行動を爲すべきである。

#### 第四章 國家章解說

### 一、國家は社會性能の完全なる發動形式たることを理得す

宇宙萬有は何れも社會的形式を有するものにして人類社會は特に其至上性能の發現なること前章叙ぶる通りである。而して此人類社

會は更に又國家なる形式を以て其性能を完全に發動するものなることを理得しなければならぬ、單に社會と云ふ形式の組織のみでは以て其性能の完全なる發動を爲し難いのである、何となれば社會といふ形式の組織のみでは秩序ある統制を爲すと能はざるが故に、更に進んだ國家といふ形式の組織を以て社會の秩序を保ち統一を圖らなければならぬこととなるからである、之を以て如何なる時代の社會と雖國家的形式を有せざるものは一もないのである、要するに國家は社會組織の中堅樞軸となるべきものであつて、國家的形式の組織を解體せしめたならば社會といふものは畢竟其根柢を失ひ遂に無秩序無統一の状態となり茲に潰亂するの外なきに至るのである、されば國家を離れて社會は其存立を保つこと絶対に不可能であつて苟も人類社會を認むる以上國家の存在を否認することは能はざるところ



である、既に社會性能の完全なる發動形式として國家を認むるとせば、社會と國家と何れか先きに形成せらるべきかといふにそはいふまでもなく社會ありて然る後に國家の發現するものと見ること自然の順序といふべきであるけれども、社會は常に國家的形式を以て其完全性能を發動せしむべきものなるが故に、假りにも社會を認むる以上直ちに國家をも認めなければならぬのである、勿論幼稚なる未開の野蠻時代に於ては現代に認むるが如き形式組織の國家は之を認むること能はざるも、野蠻時代には野蠻時代相應の秩序と統一が保たれて居たのであつて、其秩序と統一は即ち極めて幼稚なる國家的形式に據つたもので、斯る時代と雖も決して之を無國家の時代と稱することは能はざるところである、是に於て乎社會あれば即ち直ちに國家なかるべからず、國家あれば即ち固より社會を認めざるべか

らず、社會と國家と國家と社會と共に同時に發現形成せらるべきものなることを知得しなければならぬ。  
如斯、國家は社會性能完全發動の必然なる形式として組成せらるべきものであつて、人類は社會組織を離るゝこと能はざると同時に又國家組織と分つこと能はざる、謂はゞ社會及び國家の二重組織の中に個人として存在するものである、されば個人は社會の一員たると同時に又國家の一員たることを認めなければならぬこととなる、假りに現代に於て國家の一員たることを肯んせずして、國家より分離して生活を保たんと欲するも斯くの如きは事實上全く爲し能はざる所に屬す、彼の深山幽谷に單身孤居して以て帝力我れに何かあらんやと稱し、或は又た絶海の孤島に獨居して以て國家と自己とは全然没交渉なりと自認するもその深山幽谷なり、或は又た絶海の孤島



なりは抑、如何なる境地に在るべきかといふに、何れも皆是れ何國かの國家權威の下に存在せざるはないのであつて、自己の心身のみが國家組織の圏域を逸脱したりと考ふるもその蹈む所の地域が國家權威の下に屬する以上、絶對的に國家組織と没交渉なりとは稱し得べからざるのである。往昔伯夷叔齊の徒が周の粟を食まずと稱して首陽山に通れ薇を采りて命を支へたりといふが如き、伯夷叔齊は以て當時の周の國家組織より獨り脱却したるものなるかの如く思惟したるならんも、其實、首陽山は周の國家領域の一部分にして、首陽山の薇も亦た周の國家組織の領域内に産せるものなることを思はなければならぬ、斯くいふときは身獨り首陽山に通れて薇を食むと雖首陽山も薇も共に周の國家權威の下に屬するものなるが故に、敢て周の國家と絶對離脱したるものとはいひ能はざる次第である、是れは

伯夷叔齊が周の國家の下に在る首陽山に通れたるが故に周の國家と絶對分離し得べからざるものであるけれども、若し周の國家以外の或る地域に通れたりとせば、周の國家とは全然没交渉となるべきが如きも、而かも周の國家の領域にあらずと雖亦た他の國家の領域たるに於ては等しく國家的組織と絶對離脱したるものとは云ひ得べからざるのである、現代に在りても日本の國家を離れて英國の領土に入るとするも、國家が日本と英國と異なるのみであつて、國家組織の中に存在するといふ事實に就ては毫末も異なる所がないのである、或は又た北極か南極の無人島に生活すとすも尙且つ國家の領域であるかと云ふに、成る程南極北極の無人島は或は既成國家の領域にあらざる地域もなきにしもあらずと雖、個人が國家の一員たりと云ふは必ずしも土地的關係のみに於てにあらず、個人そのものが業に既



に國家的生物であつて、南極北極の無人島に生活する個人ありとせば、其個人が元來從屬する國家の外延であると云ふことになつて矢張り個人は從屬する所の國家を絶対に離脱したるものは云ふことが出來ぬのである、又た南極北極に本來生息する人類ありとせば、そは即ち其人類が必ずや國家的組織を以て其人類の社會を形成して居るものなることを認めなければならぬ、言ふまでもなく其國家が完成せる組織に達せるものとは認め難きも、幼稚なる國家的形式のものであるといふことは云ひ得るのである、畢竟個人が何れの國家を離脱しても國家的領域は不可能であると同時に、假令國家的領域を離脱し得べしとするも、個人そのものが、本來の國家的關係を離脱することは出來難いのであつて、又た既成國家の領域外に生息する人類ありとするもそれ等の人類は矢張り國家的形式に基ける組織

の下に生息しつゝあるものなることを認めなければならぬのである、叙上の如く個人は絶対に國家的關係と離脱し得べからざるものであつて、寧ろ個人そのものが國家に據りて發現せるものなることを認むるを要するのである、即ち個人が國家を組織すると云ふよりも國家的概性が個人を發現せしむるものなりと解するを至當とするのである、恰も社會概性が個人を發現せしむると同様の意味に解しなければならぬ、約言すれば個人よりも國家若くは國家的概性は先に存在せるものと認むべきである、或は又た個人が國家を組織するとするも其各個人に國家的性能の固有することなくんば、恐らく國家を組織するに至らぬのであつて、既に國家組織の觀念が個人に存在するのは、取りも直さず個人に國家的性能を固有せるものなることを證明するに足るのである、其個人の國家的性能は何に據つて得來



れるものなるかと云ふに、社會性能の完全なる發動形式たる國家的概性概能に原因するものなることを云ひ得べきである、斯くの如く個人は先天的に國家的生物であると共に、又た個人の國家的性能は社會性能の完全なる發動を遂げんが爲めに、必然的に社會が個人に發現せしむるものと云ふべきである。

太靈道に於ては上來述ぶるが如く個人の發現以前に國家若くは國家的概性の存在するものなることを認め、個人そのものが國家を組織すると云ふよりも、國家若くは國家的概性が個人を發現生出せしむべきものであるとするのであつて、此個人を發現生出せしむる所の國家若くは國家的概性は即ち社會性能の發動に依據するものなることを斷するのである、されば個人と國家と何れが重きかと云へば、言ふまでもなく個人より國家を重しとするものである、否寧ろ個人

そのものに就て最も尊重すべき國家的成格素質を認むるのである、個人以上に尊重すべき國家的成格素質が發現して、始めて茲に所謂忠義又は愛國の觀念行爲となるのであつて、忠義愛國の觀念は他動的に注入されたるものではなくして自發的に其本來の成格素質を具現するに至るものなるに外ならぬのである、忠義愛國の觀念に乏しき國民々族は唯此國家的成格素質を事實上に發現せざるまで、あつて之を啓發すれば如何なる國民民族と雖忠義愛國の觀念を具現し來らざるものはないのである、是れ即ち人類自然性能の發露であつて、又た社會性能の完全發動の然らしむる所である、されば舊來の宗教、道德、哲學等に於ては概して國家を除外して其思想の根柢を組成せるやの觀あるも、太靈道に於ては太靈より發現する宇宙が社會的形式なると共に、人類社會は其至上性能の發現であつて、更に社會性



能の完全なる發動として國家的成格素質を各個人が具有するものなることを徹觀し、各個人が此國家的成格素質を具現することに於て、社會は完全なる發動を遂げ得べきものであつて、又た社會は各個人をして此國家的成格素質を具現せしめ以て社會自體の完全發動を遂げなければ止まないものであると云ふことを理得し、特に教義中の重大なる條章として國家章を叙ふる所以である。

## 二、國家は人類社會序を確立保持すべき絶対機關たることを理得す

前項述ぶる所の如く國家は社會性能の完全なる發動形式として必然的に現出形成せらるべきものであつて、此國家は何の爲めに發現するかといふに、それは實に人類社會序を確立し之を保持すべき絶対

の機關として當然現出せざるべからざる所のものである、何となれば凡そ個人を聚團とする人類社會にありては先づ其社會の秩序を確立しなければならぬ、此社會の秩序は何に據つて確立せらるゝかと云ふに第一に社會の統一と云ふことが圖られなければならぬ、其統一を圖る上に於て個人の聚團たるのみであつては以て之を遂成せしむることは不可能であつて是非とも絶対の權威者を認めなければならぬこととなる、即ち絶対的權威者にあらざれば社會の統一を成就すること能はず、社會の統一を得ざれば以て其秩序を確立すること能はず、即ち秩序確立の前に統一なかるべからず、統一の前に權威者なかるべからず、既に權威者を認むる上は治被治を認めざるべからず、權威者即ち上に在りて下を治し、下即ち上の治に服するに於て始めて社會の統一あり、社會の統一ありて始めて社會の秩序確立



せらる、此治、被治の關係に於て社會に統一行はれ、遂に社會の秩序確立せらるゝ状態は正しく是れ國家的形式と認むべきである、但だ併し一家に在りて家族は家長に服従し、社會的團體に於ては團體員は團の長たる者に服従すると云ふが如き關係をも認めて直ちに國家的形式と稱すべきかと云ふに、單に家長家を治め家族之に服従し、團長團體を治し團員之に服従すると云ふは絶對的關係にあらずして、何れも相對的關係たることを免れぬ、されど國家の形成せらるゝ場合に於ては治者被治者の關係は絶對的であつて、治者の命令も絶對であり、被治者の服従も亦た絶對的である、此間に於て治者の命令を二三にすべからず、被治者の服従を意思の自由によりて左右し得べからず、治者の命令朝令暮改に陥るときは遂に社會の統一秩序を保持し得べからず、被治者の服従自由なるときは遂に國家の存立を

根抵より危くするのであつて、治者の命令は論言出で、汗の如くならざるべからざると同時に、此命令に對して若し絶對服従せざる者あるときは、權威者は適當に殺奪の權力を用ひ得るのであつて、斯くの如きは國家的實體に於て始めて爲し得る所で家長が家族に對し、團長が團員に對する場合に於ては、絶對的殺奪の權力を行使することを得べからざるものである、然るに國家は殺奪の權力をも適當に行使して以て其命令に對する絶對服従を被治者に向て強要することが出來得るのである、此絶對的權力を行使して以て社會の統一を圖り其秩序を確立保持する所に國家發生の理由と國家本來の職任とが存在するのである。

國家は絶對權力を行使して社會序を確立保持すべきものであると云ふことは叙上の如くであるが、如何なる法式に依つて此絶對權力



を行使する國家が理想的であるかと云ふに、先づ君主國と共和國との例を取りて其優劣を考判するときは、君主國にあらざれば絶對の權力を確實完全に保持行使すると難く、共和國は嚴密の意味に於ては唯國家的形式に類準せる組織にして以て眞の國家組織と認め得難きことなるのである、何となれば共和國に在りては絶對權威者たる主權者を國民の自由意思に依りて選舉するものなるが故に、畢竟統治の代理權を選出したる主權者に行使せしむるに過ぎざるものであつて、主權者に統治せらるゝと云ふよりも寧ろ自らを統治するの結果と爲る、即ち國民各自が各自を統治するの代理として主權者を選出するに過ぎず、されど眞實嚴密なる國家の意義に於ては、個人各自が自己を統治すると云ふことは一個人のみならば或は可能なりとするも、個人を聚團せしめたる社會としては聚團中の各個人

各個人各、其分を異にするが故に、個人各自に自己を統治すること絶對に不可能事に屬す、而して個人各自は其本來の成格として社會的素質を有するが故に單獨孤居すること固より能はざる所であつて、社會の一員としてのみ個人は存在し得べきものであるから、既に社會の一員たる以上、社會性能當然の發動たる國家的形式に背反することに至るのである、之と同時に國家は社會の中堅樞軸として發現するものであつて、個人各自の成格素質中に國家的成分を認め得ることとは勿論であるけれども、個人なるものに主權を認むると云ふことは全然難き所である、其主權を有せざる個人各自の自由意思に依りて主權者を選出すると云ふことは、全然不合理たるを免れぬのである、既に主權的性質なき各個人の多數が主權者を選出したりとて、之を擬主權者と稱することを得べきも以て直ちに眞實の意義に於け



る主權者とは云ふことを得ないのである。要するに個人各自には主權的性質がないのに拘はらず主權的性質なき各個人が主權者を選出するも其選出されたる主權者は眞の主權者としての性質を有せざるものとなるのである。されば共和政體に於て個人各自が個人各自を統治することが不合理たると同時に主權的性質なき個人各自が主權者を選出することも亦た不合理たることを免れぬのである。是に於て乎共和國は之を擬國家とは稱し得べきも眞の國家とは認め難きこととなるのである。斯くの如き國家に依りて眞實の社會序を確立保持することまた自ら不可能となるのである。

然らば共和國に比して君主國は如何と云ふに、理想としては君主に絶對權力ある國家こそ眞實の意義に適へる國家と稱することを得る、併し此絶對權力ある君主を主權者とせる國家は甚だ希であつて

古今の歴史を通觀するに何れも理想的なるものは發見し得られないのである。主權と國家統治の實權とは常に一致せしめて之を君主が現體行使するにあらざれば以て理想の國家と稱することは得べからざるのである。方今世界に君主國として認めらるゝものゝ中に在りて、果して斯くの如き理想の君主國家があるのであらうか、未だ吾人は斯る君主國を發見し得ざるも、究竟如斯國家の出現に依りて社會の統一秩序の完全に確立せらるゝものなることを認め、之に向て努力しなければならぬのである。共和國は如何に努力し進歩せしむるも其根抵が不合理なる故に遂に完全理想の境地に到達することは不可能であるが、君主國は其發生成立の根抵が社會性能發現の必然的原理と合致せるが故に、之を發達進歩せしむれば其究極に於て理想の國家たるを得るに到るのである。而して何故に君主國が社會性



能發現の必然的原理に合致せるかと云ふに、社會を全體として觀察するときは社會的衆團をなす個人各自が主權的發動を爲すと云ふことは全然認め難き所であつて、如何なる時代如何なる社會に在りても主權的發動をなし得べき資格者は特有の人格に限らるゝもので個人各自は唯此特有の人格者に統率せらるゝに過ぎざるものである、米國は共和政體と稱するも其共和制の起原に溯りて觀察するときは、當時の特有の人格者にして主權者たる地位に在る寧ろ君主とも云ふべき華盛頓の自由意思に依りて共和政體となしたるまでであつて、當時の米國民全體の自由意思に依りて共和政體となしたる譯ではない、佛蘭西が共和政體となり、最近支那が共和政體となれるが如きも、何れも國民全體の自由意思として共和政體となれるにはあらずして特有なる人格者が先導首唱し遂に國民の自由意思を左右して茲

に到らしめたるものであつて、若し先導首唱者たるべき特有の人格者なからんには如何なる革命も起ることなく、又た帝政を覆へして共和制を布くにも至らざるものである、即ち共和制と雖國民各自の自由意思に依據すると稱するものゝ、其實是特有なる人格者の自由意思の發現擴充たるに外ならぬのである、此等特有の人格者こそ即ち主權的資格者として社會性能が必然的に發生せしむるものであつて、個人各自は此主權的資格者に追隨服従するに過ぎざるものである、此故に主權的資格者が其自由意思に依りて、主權を國民各自に在りとして共和制を布くに至るが如きは全然社會性能の發現をして強いて變則ならしめたるものであつて、順則としては主權的資格者が自ら主權を保持し、之を行使することを以て至當と認めなければならぬのである、是に於て乎社會の秩序を確立保持する上には共和政體



の國家よりも君主政體の國家を以て理想に適へるものと認むることを合理とすべきである。

叙上の如く君主國家を以て理想至適と認むるも、而かも君主が直ちに國家なるかと云ふに、是れ決して然らず、君主其ものが即ち直ちに國家なりとするは驚くべき妄斷であつて、之を換言するときは君主は直ちに國土であり、直ちに人民であると云ふことに歸着するのであるが、恰も人民各自に主權ありとする共和制と正反對に、君主が直ちに人民であると云ふことになつては以て統治の主權者たる資格を顛倒することになるのである、共和制にありては人民が主權者となり、君主即國家の説に於ては主權者が人民となる奇觀を呈するに至るのであつて、斯くの如きは不合理も亦甚だしきものである、更に又た彼の君主機關説の如きも純理としては認め難きものであつ

て、若し君主が機關として統治權を行使するとせば、其統治權を行使するに適したる資格者あらば何人と雖實力ある勢權者が代つて主權者即ち君主となるべき結果を生ずるに至る、支那の如きは恰も君主を機關として認むるの理論を實現し、主權者の更迭したること幾朝なるを知らざるも、斯くの如きは等しく君主國と云ふも主權が完全に行はるゝものと認むることを得ないのである、君主は一系持續して其主權を確保行使するを以て原則としなければならぬ、此一系持續して主權を確保行使する君主は勿論國家運轉の機關に過ぎざるものと云ふことを得ない、即ち君主は即國家でもなければ又た即機關でもないのであつて、此君主即國家及君主即機關の事實を超越して、君主は實に國家同融の統主であるのである、國家同融の統主が頻々更迭せらるゝと云ふが如きは全く變則であつて、必ずや一系持續さ



れなければならぬものである。此一系持續されたる國家同融の統主に依りて統治さるる國家は眞に理想的國家であつて、斯くの如き國家に依りて始めて人類社會序は確立保持さるるに至るべきものである。

### 三、國家の究竟目的は社會完序を確立するに あるものなることを理得す

國家は社會性能の完全なる發動形式として發現し、人類社會序を確立保持すべき絶対機關であつて、其究竟目的は何であるかと云ふに、それは社會完序を確立するにあるのである。社會完序とは社會に於ける完全なる秩序の意味である。現代世界に於ける國家の中にありて果して此完序を得たる國家あるかと云ふに、未だ以て之を發

見することを得ない。勿論過去の時代に於ては完序を得たる國家の發現したることはないのである。國に戰亂なくまた犯罪なきの状態に入らざれば以て完序を確立したりと稱するを得べからざるのである。勿論完序を確立するに至る迄の過渡時代に於ては戰爭は是認せざるべからず、また犯罪も全然皆無となすこと難きも、一旦完序を確立するに至らば戰爭を起さんと欲するも之を起すことを得ず、犯罪を爲さんと欲するも之を爲すことを得ざるに至るのであつて、全く理想の時代となるのである。併し斯る時代と雖軍備を撤去し又は法律を廢止するには全然不可能であつて、軍備と法律は國家の形成存立上絶対に缺くべからざる所のものである。唯理想完序の時代に至らば此軍備を用ふるの要なく、また法律を行ふの要なきに至るまである。國家としての絶對的權力は優強なる軍備と完備せる法律



とに依らざれば以て之を保持すること難きに至るものであるが故に、太靈道に於ては永久に國家の上に軍備と法律の必要なることを是認するのである。若し軍備と法律とを撤廢せは唯單に社會と稱し得るのみであつて、以て國家と云ふことは能はざるに至る。國家に軍備と法律との必要なることは寧ろ絶對的であると云はなければならぬ。畢竟此軍備と法律とに依りて國家は成立し、社會は完序を確立し得るに至るべきである。

國家は軍備と法律とを以て形成存立を保ち、茲に社會の完序を確立することを究竟の目的とするものなるが故に、苟も完序確立に必要な一切の國家的行動は國家性能必然の發動として之を是認しなければならぬこととなる。其結果が個人各自の不利不幸となるべき場合と雖、國家は敢然として必要なる行動を斷行すべきである。國

家の利害得失と個人の利害得失とは一致すべき場合もあれど亦全然背馳すべき場合もあることを認めなければならぬ。例へば戦争の如きは國家として必要なる場合と個人としては却て直接的には全然不要なるのみならず、不利不幸に終ること寧ろ多いのであるけれども、併し國家は此個人の不利不幸をも犠牲とし忍んで戦争を敢てせざるべからざる場合あることを認めなければならぬ。若し國家存立の目的が個人利福を圖るのみにあるものとするときは、勢ひ國民の輿論に聽從せざれば國家として何等の行動をも爲し難きに至るのである。是に至りては國家が當然必要なりと認むる戦争の如きも若し國民の輿論が個人利福に反するものとして之に反對するときは、遂に其必要なる戦争をも斷行し難きに至り、國家は不測の危険に遭遇することを免るゝ能はざることとなる。國家の存立危険とならば個人の利



福も亦た損傷せらるべきは云ふまでもなき所であるが、併し輿論なるものは個人利福を標準とするときは常に現實の利福に捉らはれて永遠の利福を顧みざることなしとせず、殊に輿論と云ふも少數の主張に依りて唱導せらるゝ意見が遂に多數個人を動かして茲に輿論となるもの多く、多數個人の自覺より發現して眞の輿論を構成するとは極めて稀である、されば輿論と云ふも畢竟眞實の民意の發露ではなくして、少數主唱者の意見に盲従したるものなるに過ぎざることとなる、斯る盲従的多數者の輿論を根據として國權を運用せんと欲する場合に於ては、國家は根抵ある徹底的行動を執ること能はざるに至るのである、斯くの如くにして遂に國家は其存立を失ひ、個人も亦た泯滅の悲境に陥るを免れ得ざることとなる、されば國家は個人利福を圖り且つ輿論を容るゝこと固より其要あると同時に、

若現實的直接の個人利福と國家行動とが背反することありとせば、個人の利福及國民の輿論に超越して斷乎たる行動を執ることが必要である。

要するに國家の究竟目的は社會完序を確立するにあるが故に、此究竟目的を達成せしむるには軍備と法律とがなくてはならぬ、而して此究竟目的を達成する必要上國家の行動が直接的に個人利福と背反し、また輿論と背馳することありとするも、國家は軍備及法律を適法に運用行使して以て當然の行動を執るべきである、但し茲に社會完序と云ふは日本は日本の社會、英國は英國の社會、米國は米國の社會といふやうに、現在に區劃せられたる國家境域中の社會に於ての完全秩序の意味ではない、全世界人類總體を社會と稱し、此人類總體社會の完全秩序が確立保持されなければ、以て社會完序の確



立を遂げて國家の究竟目的を達したるものとは稱し能はざるのである、是に至りて現在の如く多數の國家が分立すると云ふことは人類總體社會の完序を確立する所以の一階梯であるとはいひ得べきも、現状の儘にして直ちに人類總體社會の完序を確立することは不可能である、是に於て乎世界の各國家は世界國家として統一せられなければならないこととなる、此世界國家が發現して人類總體社會を統治するに於て、始めて所謂社會完序は確立さるゝの機運に到達するのである、此世界の各國家が統一せらるゝと云ふの眞義は後の項に改めて述べべき機會あるが故に、特に茲には委はしきに涉らずと雖、畢竟現在分立せる各國家の究竟目的は世界的大國家を發現せしめ、以て人類總體社會の完序を確立すると云ふことに存するものなることを理得しなければならぬのである。

#### 四、國家は至上權威を有するものなることを理得す

國家の究竟目的は既に社會完序を確立するにあるものなることを理得したる上は、また國家は至上權威を有するものなることをも理得しなければならぬ、前項に述ぶるが如く國家が社會完序を確立する上に於ての必要に基き、個人の利福及多數者の輿論とを超越して斷乎たる行動を執るの際に於て、若し國家に至上權威を認むることなからんには國家は遂に其自由權力を發揮行使することを得ざるに至るを免れぬ、斯くの如きに至れば究竟國家は國家としての目的を達成し難きこととなり、國家存立の根據と理由とを失ふのである、國家が形成されて存立し其目的を達成する上には先づ其至上權威を



確持せざるべからず、而かも此至上權威たるや社會に依て附與せられたるものにもあらず、また國民に依て結成せられたるものにもあらず、實に社會性能完全の發動として必然的に國家を發現するの際に於て、國家が當然自發する所の至上權威であつて、社會にも國民にも共に直接若くは間接に其關係を持有するも、しかも社會に依て侵されず、國民に依て奪はれざる絶對的權威である、此絶對的至上權威は國家の主權と並行するものであつて、寧ろ主權即至上權威至上權威即主權と稱すべきである、若し主權を失墜せば至上權威を失墜することとなり、また至上權威を失墜せば主權を失墜することとなる、主權失墜され至上權威失墜するに至らば何を以てか國家の存立を期することを得ん、主權を尊重すると共に其至上權威を尊重しなければならぬのである。

至上權威を尊重し絶對に侵すことなく、また侵さることなく、之を發揮するに於ては益其國家は隆盛なるを得べく、至上權威を尊重せざるに於て其國家は遂に衰運泯滅を免れ難きに至るのである、いふまでもなく絶對至上の權威を國民の自由意思に依りて左右さるといふが如きは固より認め難き所であつて、若し國民の自由意思に依りて左右さるゝ至上權威ありとせば、そは其實至上權威にあらずてまた其國家は主權をも有せざるの義となるのである、何となれば絶對至上の權威にして侵すこともまた侵さることもなかるべきものを、國民の自由意思に依りて左右さるゝは、之を至上權威に近きものと稱することは能ふべきも、以て直ちに至上權威なりと斷ずることは能はざる所である、之と同時に至上權威の失墜に依りて共に失墜せらるゝ主權は之を主權に近きものと稱するを得んも、以て直



ちに主權其ものなりとは斷じ能はざる所である、主權は固より分割  
 または消長あることなき絶対でなければならぬ、分割さるゝ主權  
 消長ある主權共に主權と稱するを得ず、又た之に依て至上權威も認  
 むること能はざる所である、共和國の如きは主權の要素は各國民個  
 々に存在すると認めらるべきものなるが故に、其主權は國民個々に  
 分割所有せらるゝものと云ふの外はない、斯る分割されたる主權は  
 之を主權に擬せられたるもの、または主權に近きものと稱し得るま  
 で、あつて、決して眞實義の主權と云ふことを得ぬ、既に眞實義の  
 主權にあらざる上は、又た之に至上權威を認むることも不可能であ  
 る、國家に隆替興廢は免れざる所なれども、それは國家の隆替興廢  
 であつて主權の消長を意味するのではない、國家興隆する時は主權  
 發揮せられ、國家頹敗するときは主權發揮せられざるも、こは單に

主權の發揮さるゝと發揮されざるとの等差に過ぎざるものであつて、  
 主權其ものゝ實質は國家の興廢に依りて消長するものではない、又  
 た眞實義の國家として存立する上は國家の興廢、主權の發揮、不發  
 揮に依りて至上權威に關係影響あることもないのである、即ち國家  
 の主權も至上權威も共に絶対であつて、國家推移の狀態を超越して  
 居るものである、此超越したる主權に服し至上權威に従ふと云ふこ  
 とは、國民の本分であると共に、主權者は其本有の主權を發揮し、  
 而して此國家の至上權威を顯揚して以て國家の究竟目的達成に適は  
 しめなければならぬのである

五、國家は統合せらるべきものなることを理  
 得す



國家が其究竟目的たる社會完序を確立する上に於て、現在世界に分立せる國家狀態其儘を以てしては到底此究竟目的を達成することは不可能である、是に於て乎國家は世界的に統合せられなければならぬ順序となる、國家が統合せられて世界國家となり、始めて人類總體社會の完全秩序が確立せらるゝ時は國家は茲に其究竟の目的を達成したるものといふことを得るに至る、此統合されたる世界國家の發現されざる現代及現代以後の或る時代までは到底社會完序は確立さるゝことは望み難い、而して何れの時期に世界的に國家が統合せらるゝかと云ふに之には先づ凡そ五大時期を経過しなければならぬ、其五大時期とは如何なるを指していふかといふに、人類社會は秩序を確立する爲めの必然の結果として國家なるものを發現せしむるに至るのであるが、其社會秩序の確立に自然の時期があると共に、

此社會秩序を確立する國家にもまた自然の時期があつて其時期に適應して形成されて行くものである、即ち社會秩序確立の時期と國家形成の時期とは一致して居るものである、其時期を五大時期と云ふは、其第一が無秩序時代であり、第二が種族的秩序時代であり、第三が民族的秩序時代であり、第四が人種的秩序時代であり、第五が世界的秩序時代である、此第一時期無秩序時代に於ては無論其秩序を確立すべき國家なるものを認むることは出来難い、第二時期種族的秩序時代に於て始めて種族的國家なるものが發現形成されたのである、次に第三時期民族的秩序の時代に民族的國家發現形成され、第四時期人種的秩序の時代に人種的國家發現形成され、第五時期世界的秩序時代に世界的國家發現形成さるのである、尤も第一時期を無秩序時代といふも其實個人あれば社會あり、社會あれば秩序あり、



り、此社會は國家に據らざれば確立保持さるゝ難きも、第一時期の如きは國家ありといへば云ひ得るも、而かも未開野蠻にして其國家たる極めて程度幼稚に且つ動搖し易く、殊に此秩序を確立する所の國家としては、其要素を具備したるもの發見し難きを以て茲には第一時期を無秩序無國家の時代となしたり、然れども嚴密の意味に於て云ふときは第一時期は幼稚なる秩序時代、幼稚なる國家時代と稱することも敢て不可なき次第である。

而して人類歴史を通觀して現代は以上の五大時期中に於ける何れの時代に屬するかと云ふに、第一時期たる無秩序未開野蠻の無國家時代は既に遠き以前に經過し去り、次に來れる第二時期種族的秩序時代即ち種族的國家時代も亦た過ぎ去りて、今や當さに第三時期民族的秩序時代即ち民族的國家の時代となつて居るのである、曰く日

本民族に依る日本國家、曰くアングロサクソン民族に依る英吉利、曰くスラブ民族に依る露西亞、曰くビルマン民族に依る獨逸、曰く支那民族に依る支那、と云ふが如く何れも皆悉く民族を本位とし形成されたる所の國家時代であつて、應て來るべき時期は人種的秩序、人種的國家の時代である、而かも現代は民族的秩序、民族的國家の時代でありながら、既に其一脚を人種的秩序、人種的國家の時代に投入せるものと認むべきである、米國に於て排日熱の行はるゝ、濠洲に於て白濠洲主義の行はるゝ、亞非利加に於て東洋労働者の排斥さるゝ、歐羅巴に於て亞細亞人の擯斥侮蔑さるゝ如き、何れも原因は一ならずと雖究極する所異人種排斥の萌芽に非らずといふことなし、且つ世界の人口は年々歳々驚くべき數を以て増加し、生存競争の區域は益々制限さるゝに於て、過去時代に在りて種族と種族と團



結して互に相競争せるものが進んで民族的團結の競争となれるが如くに、更に進んで人種的大團結を以て今後の時代に處して互に競争を事とするに至るは殆んど必然の徑路と云ふべきである、之に加ふるに交通機關の整備と、經濟關係の密接とは此時代の傾向を促進して、茲に人種的秩序、人種的國家の時代を發現形成せしむるに至るのである、勿論眞の人種的國家の發現するに至るは幾變遷を経たる後なるべきも、時勢の推移する所遠からざる將來に於て人種的時代となること明白疑なき所である、然れども茲に人種的時代と云ふは人種を本位として國家を確立する國家の發現する時代を云ふのであつて、敢て異人種を排斥すると云ふが如き偏狹なる思想を是認するものではない、等しく人類たる以上、人種の相違を以て徒らに他を侮蔑し排斥すると云ふ如きは、太靈道の教義に於て斷じて容れざる

所である、唯現在の民族的國家が全能力を盡して他の國家と競争するが如く、人種的時代の國家に在りても其人種的國家が全能力を竭くして眞實の競争を爲すべきである、

斯くの如くにして現在の民族的秩序が次に來るべき時代に於て人種的秩序となり、此人種的秩序を経過して然る後に始めて第五時期に入り世界的秩序、世界的國家の時代を現出するのである、世界的國家の時代に至りて始めて全人類の總體社會は茲に完序を確立して理想の世界たるを得るに至るのである、以上述ぶるが如き徑路に於て人類は最初の無秩序時代より遂に其最終に至りて社會完序を確立するものであつて、此秩序確立の絶対機關たる國家も亦無國家時代より遂に統合せられたる世界國家となるべきである、

上來述べ來れるが如く國家は社會性能の完全なる發動形式として



發現形成さるゝものであつて、人類社會序を確立保持し、遂に完成國家を社會の上に成立せしむるを以て究竟の目的とし、至上權威を有して統合せられたる世界國家を形成せしむるに至るのである。

### 第五章 個人章解説

## 一、個人は太靈に據りて生命を享得せるものなることを理體す

個人章を講ずるに當りては先づ個人と云ふ意義を明かにして置く必要がある、即ち個人とは生命を有することを自覺せる人格體であつて、而して個人は其生命を如何なる所より享得し來れるやを考ふるに多くの人は無造作にも其父母より生命を享得したりと思念する

ならんも、其父母は何れより生命を得たるか即ち祖父母より之れを得、其祖父母は又曾祖父母より之を得たりとすべく、限りなく溯りて遂に原始時代に達すべし、而して此原始人類の生命は其根原抑々如何と尋究せざるを得ず、茲に至りて此生命の絶對的根原即ち溯り盡して一の大なる生命創發の根原體を尋究せずして、唯單に我を生みたるものは父母なるが故に我の生命は即ち父母の附與せしものなりと考ふる如きは思慮の極めて淺薄幼稚たるを免れぬものである、父母は實に生命發現の機遇を與ふるものにして、生命の創發力は父母以外に別に之れを認めざるべからず、然らば此生命の創發の絶對的根原は果して何であるかと云ふに即ち太靈に外ならぬのである、是獨り人類に止らず動物植物一切の生命は皆太靈によりて發現するのである、併しながら他の生物のことは茲に暫らく述ぶるの必要な



も人類としては眞に太靈に依りて生命を享得し又た須臾も太靈を離れては生命を保つことが不可能であることを知らなければならぬ、  
 嘗に原始人類にのみ生命を附與したるに止らず、吾人並に其父母も皆太靈より生命を享得し保持しつゝあるのである、即ち太靈と吾人の生命とは直接の交渉連絡があり吾人が生命を保つ上に於ける一呼吸は是太靈と直通する所以である、要するに人類の生命は父母に介依しつゝ太靈より直接的に享得したるものであつて父母は即ち生命享得の機遇を與ふるものである。

而して既に父母に介依して機遇を得爰に生命を享得し來るとするも、而も最原始人類には其所謂機遇を與ふる父母なるものあるを認め得べからず、然らば最原始人類は如何にして生せしか、今熟々原始的生命發現の状態を考ふるに宗教に云ふが如く全智全能の神が人

類を創造したりとするは恰も父母が吾人を創造したりと云ふに等しき淺薄の思想にして、是れ創造者と被創造者との相對的關係を認むるに止り、未だ以て絶對的生命の根源に觸れたりと云ふことを得ず、生命は創造にあらずして太靈全眞の自然的發現である、而して此自然的發現なりとする理論の當然の結果として、原始人類なるものは地球の表面上到る處機遇の熟する毎に發生せしものなることを認め得べく、彼の神道に於ける諾冉二尊、基督教のアダム、イブの如く單に一偶の陰陽男女を人類の始祖として世界に繁殖蔓延せしものとするは自然的發現の理論上到底是認し能はざる所である、而して原始人類の自然的發現の状態を考ふるに、地熱、大氣等地表に於ける種々の状態並に天體即ち太陽系は勿論進んでは全宇宙との關係連絡等よりして高等生物發生に適當なる機遇純熟したるに由て發現した



るものなることを推斷し得るのである、然らば何故に原始時代以後今日に於ては原始的人類の如く自然的發現の状態を見ることを得ざるかと云ふに、それは地殻、地熱、雰圍氣等地球上一切の關係並に天體との關係等に依り原始時代の如き人類發生に適當なる機遇が再び到來せざるによるものである。

一切の生物の發生には常に熱との關係を離るることが出来ぬ、又一面水とも密接の關係を認めねばならぬ、要するに主として水との關係及び熱の程度如何に大なる關係を有す、現在地球の表面に於ても種子なくして生物の自然的に發生する事實は必ずしも認め得難き所ではない、或は生物學の上より肉眼を以て見るべからざる所にも必ず種子の存在することを主張することあらんも、強て之を種子と稱するならば普遍的種子とも云ふべくして各種の生物に特有する種

子が存する譯ではない、然らば其普遍的種子とは何であるかといふにそれは即ち靈子である、靈子が機遇事情に依りて適應變化し茲に各種の生物となつて發現し來るのである、此場合生物の發生に適當なる事情機遇といふことは生命發現の根本原因ではなく、唯だ一の助因をなすに過ぎぬ、即ち其根本原因は靈子の一元あるのみであつて靈子の活能なくんば如何なる機遇事情ありとも生物の發生を見ることは絶對にないのである。

要するに生命の自然的發現の根本即ち絶對的生命原なるものは靈子の一元に外ならぬのであるが、其發現の状態は劃然二様に區別せらるゝるのである、即ち人類の如き高等生物は過去の生命發現に最も適應したる時機に於て原始的發現をなしたるも、爾後地球の成形及び天體との關係等に異動變化を來し、最早原始的發現をなすに適



せざるものとなり、唯單に祖先より綿々として傳はる所の系脈種子によりてのみ生命の發現即ち繁殖を見ることゝなつたものである、而して一面虫魚草木菌苔等の下等生物に至つては主として水氣及び熱氣等が此等の生物の發生に適するとき今尙ほ地球の表面到る所に種子なくして自然的に湧出發芽密生の状態を目撃し得るのである、斯くの如く下等生物は自然的發生を見ると共に一面又其自然的に發生したるものが自ら原始的種子となりて繁殖作用を運営しつゝあるのである。

下等動物は高等動物に進化し、高等動物は更に進化して人類となれるものなりとするダーウキンの進化論は太靈道に於ては容易に其全部を認め得ざる所である、各種生物特殊の性能は皆其生命原たる靈子の創發化育する所で、一木一草の微と雖も其特殊固有の性能を

根本的に變化すること、能はざる所である、勿論人類は人類として、猿猴類は猿猴として、又或る虫魚、或る草木は各其虫魚草木としての進化若くは退化する事實は認め得べきも、全然種類を異にする生命體に進化向上すると云ふことは事實の上にも又理論の上にも到底是認するを得ないのである、且進化論に於ては元始生物生命の根本原因を明かにして居らぬと同時に所謂生物が進化の因由をも説て居らぬ、然るに太靈道では元始生物の根本原因は靈子に在りとし、而して進化するは靈子の創化力に依るものとして居る、等しく種子の起原を論ずるに於て太靈道は進化論に比し根本的であり、又た進化を説くに於て徹底的である。

靈子の創化力は地球の成形が人類の發現に適應する場合に於て即ち直ちに人類を發現し、猿猴類の發現に適應する場合には即ち直ち



に猿猴類を發現するものであつて、要するに下等と高等とを問はず其機遇の熟するに隨て何等の拘束制限を受くることなくして自由自在に發現し得べく是れ即ち靈子の創化力の絶對なるを證するものである。猿猴は高等動物にして其形體動作能力等多少人類に類似點あるが爲めに原始人類は猿猴の進化せしものなるべしとするは、是れ種原不變化の法則に反する臆斷臆測といはねばならぬのである、要するに進化論は原始的生物發現以後の状態のみに徴して臆斷を逞くしたるも其以前に溯りて根原を説明し得ざるは論據の薄弱なるを免れぬのである。元來各種生物は發生の起原を異にするものにして、其各種類の間に於て連絡的に進化の法則あるにあらず、固より生物發現の大根本は靈子の一元にして即ち靈子は萬有生命の根本的種子ともいふべきものであるが、此靈子が一旦發現して萬有生命を形成

するや、各生物の原始的種子即ち生命の本體を生じ一の定格を成すに至るのである、然るに其各種生物の間に混亂的變化を來し生命の本體が分裂合同を行ひ原始的種子が常に動搖して定格を失ふと云ふことは常に事實に反するのみならず理論上に於ても到底首肯し得ざる所である。

勿論生物は周圍の状態即ち其境遇に適應して變化すべき性能を有し、而して此適應性も亦固より靈子に依りて賦與せらるゝ所であるが、而かも變化は生命の本體即ち定格を同うする生物の間に行はるゝもので、一の生命體が全然其定格を滅して他の生命體を形成すると云ふことは原理としても將た事實としても是認すべからざる所である、又同一生物の進化に就て觀察するも、其進化には自ら程度ありて無限的に即ち原始的種子を破壊するが如き變化を生ずべきもの



にあらず。例へば之を元始以來の人類の上に徴するに、野蠻が文明に進み人類は大なる進歩發展を遂げたりと思考しつゝあるも、個人の能力體力に就て見るに必ずしも大なる進化を認むることを得ず、思想上は勿論凡ての活動の上に於て今人は古人に比して優秀の點を認め難く却て個人として古人に偉大なるものが多いのである。唯、人類は社會的に進化發展しつゝありと云ふことは事實である。即ち教育の普及交通の發達等により多數人類の能力が平均的に進歩し、且幾千年間に亘りて蓄積集合せられたる勢力により人類は社會的に益々完序の域に進み所謂文明なるものを形成しつゝあるのである。

人類が社會的に進歩發展すべき能力は元始時代より伏能として具せしもので、此伏能は社會周圍の事情によりて發現するものである。他の動物にも伏能は存在するも人類の如く大なるものでない。

而して各生物の伏能を異にするは是れ原始的生命發現の場合に於て各其機遇を異にするが爲めであつて、而して、此伏能啓發の相異は育成の程度に比例するものにして例へば人類の如きは其嬰兒と成人との間に大なる徑庭がある。即ち育成の程度が異なるからである。又た等しく人類間に於ても平凡人より偉人に近くに從て益、此育成の程度に比例して伏能啓發の程度が異なるのである。更に又た人類は其社會的伏能に於ても他の生物より大なること勿論なるを認めなければならぬ、之と共に人類が社會的に進歩し今人は古人に優れりと思考するは是れ實に個人の進化に非ずして、寧ろ社會的育成の過程に外ならぬのである。即ち草木が發芽、開花、結實するは進化にあらずして伏能の順次發現する状態に外ならず、人類も亦伏能が種々の關係事情により即ち境遇の變化に適應して社會的に發現し來るまでに



して敢て其性能に於て下等より高等に進みたりと見るべきものではない。

人類の伏能、生命の原質に就て研究するときには、彼の専ら原生以後の状態にのみ着眼する進化論などの想像も及ばざる原理を發見し得るに至るのである。人類は抑、如何にして地上に發現し來れるかと云ふに、地熱の未だ冷却せざるに當りて靈子の創化力は既に人類の原形質を形成し、而して地熱の冷却するに隨て原形質其物を保持せんが爲めに、個體として始めて地上に發現せしものであつて、此故に人類の個體には必ず熱を有するのである。熱が無ければ原形質を保持することを得ず、されば地熱の冷却と共に原形質が個體となりて發現せしものであつて、即ち地熱冷却以前の原形質に於ける熱度が個體によりて保持されつゝあるので、畢竟個體は原形質を保つ必

要上形成されたるものであると云ふことを得る。故に人類が地上に始めて發現したるとき、の機遇其儘の状態が個體生命によりて保持されるのである。要するに個人の生命及び其生命の因て發現せし原形質皆是れ靈子の一元に發し、而して靈子は即ち太靈の活現に外ならぬから個人は太靈に據て生命を享得せることを理體すべきである。

## 二、個人は太靈全真體現の組織體なることを理體す

前項述ぶるが如く個人は太靈によりて生命を享得して居ると同時に、又太靈の全真を體現すべき組織體なることを理體しなければならぬ。大は宇宙より小は一木一草の微に至るまで一切の萬有悉く太靈全眞の活現にあらざるはなしと雖、就中人類は既に社會章の項に



人類社會は大宇宙間に於て至上性能を有することを述べしが如く  
 個人の組織體は太靈の全眞を體現する上に於て亦た等しく至上至貴  
 のものであると云ふことを得る、萬有の生命に就て其組織體が完全  
 なるに不完全なるにより全眞體現の上に自ら等別差異の生じ來る  
 は免れざる所であつて熟々萬有生命の實狀を觀察するに組織體の完  
 全不完全の程度に依りて其性を異にし其能を別にし千等萬別歸一す  
 る所なく、植物は地上に繁茂する以上に性能を有せず、動物に至つ  
 ては或ものは水中に游泳し、或ものは樹上に構巢し、或ものは深林  
 に生息し、或ものは原野に奔馳し、或ものは家畜され、或ものは寄  
 生す、是れ畢竟其組織體の相異なるに依るに外ならぬのである、而し  
 て人類に至りては横目縦鼻、縦立横臥、思索發明、理智圓滿、洵に  
 太靈全眞を體現し得べき賦性伏能を有することを知り得べきである、

人若し暫らく擾々の俗情を離れて瞑目沈思し、而して人類なるもの  
 は此崇敬すべき太靈の全眞を體現し得べき至高至大の賦性伏能ある  
 組織體なることを自覺自信せば、油然として自重自尊の念湧起せざ  
 るを得ざるに至るのである、蓋し、太靈の全眞は、人類に、依りて、始めて  
 體現を全くするものであつて、他の生類も亦た等しく太靈全眞の活  
 現なりとは云ふを得るも、未だ以て全しと稱し難く唯だ夫れ人類に  
 至つて太靈の全眞を全眞的に發顯體現し得るのである、  
 既に人類は太靈の全眞を全眞的に體現し得べき組織體なりとする  
 も、此賦性伏能を顯輝啓發せざれば以て全眞の體現を完全ならしむ  
 ることを得ず、爰に於てか如何にして賦性伏能を啓發顯輝すべきか  
 の問題起る、而して人類の組織體は物質、精神の二元より成り其根  
 元に更らに靈子の一元を認め得べきが故に、先づ物質より成れる肉



體の健全と而して精神の發達とを圖らざるべからず、之れと同時に生命の根原本質たる靈子の作用を顯現して以て全生命組織の進展發育を講じなければならぬ、否な寧ろ靈子の作用を顯現すれば肉體の健全も將た精神の發達も自らにして完成せられ全生命組織體の進展發育全きを得るに至るのである、即ち靈子の作用に依つて心身を靈化し靈的活能を顯示して爰に太靈の全眞を體現しなければならぬのである。

### 三、個人と親祖と子孫と共に全一系體なることを理體す

現在の個人は原始的人類の如く地上に直に湧起發生することの絶對に不可能なることは既に第一項に述べたるが如くにして、畢竟原

生に適應すべき機遇既に已に去りたるが爲めである、隨て現在の個人は遠き親祖より傳はる所の系脈によりて生命を享得するの外はないのである、即ち親祖を離れては生命を認むること能はず、勿論現在個人生命と太靈靈子との間には直通的關係あるも、個人生命の起原は親祖より傳はりしものにて、即ち親祖の生命が系脈を追ふてその儘茲に發現しつゝあるのである、故に親祖を離れて自己の生命なく、同時に子孫の生命は自己を離れて發現することが不可能である、即ち現在の個人は親祖と子孫とを一貫して離るべからざる相關連脈であり以て全一系體をなして居るのである、換言せば親祖と子孫と自己とは全き一の系統をなしたる生命體であつて肉體は空間的に分離して居るが、人類としての生命格は原始時代の人類より最終の人類に至るまで自己と親祖と子孫との連脈關係に於て同體不離の



全一系體をなして居るのである。

元來個人の生命なるものは畢竟原形質保持啓發の爲めに存するものである、個人の生命は肉體の死滅により時間的にも空間的にも制限せらるるものなるが故に制限せられざる原形質は時間空間の制限を受くる孤立的單一なる個人の生命のみにては完全に保持すること能はず、隨て亦全眞を發揮すること能はざるものである、此故に原形質を保持し全眞發揮を完うする必要上爰に自己と親祖と子孫とを全一系體となし此全一系體の上に始めて時間空間を超越したる大生命を活現し全眞性能を完全に發揮せらるゝに至るのである、原形質とは宇宙大生命の活能に依り地上に人類元始生命の根本原質が形體を爲して發現し來れるものを指すのであつて、此原形質には全眞性能を具有し、全眞性能を具有する原形質が個人生命の全一系の上に

保持せられつゝあるにより始めて個人に依り全眞が發現さるゝのである、若し、親祖、個人、子孫を全一系體とせずして之を個々分離孤立せる單一の生命體と見るときは到底全眞を發揮する能はざることとなるのみならず、個々の生命を其生命の起原と引き放して存立を認むるは理論の上に於ても到底首肯し得ざる所である。

各個人は個人と親祖と子孫とを全一系體として原形質を保持し全眞發揮をなすといふ大自覺の下に始めて大なる眞勇を鼓舞して活動することを得るのである、古來人類が種族保存の爲めに多大の努力を辭せず其極身命を抛つて戦争を敢行するあるが如きは、是れ畢竟大に生きんとする全一系體的生命の性能活現衝動に出づるものであつて、若し個人の生命が孤立的單一の觀念に支配せらるゝならば決して斯の如き大努力、決死的觀念は起らぬのである、故に時に臨ん



で敢て戦争を辭せずと云ふことは原形質保持、全眞發揮を具現する上に於て當然起り來るべき現象であつて太靈道に於ては人類生命の全一系の上に全眞發揮を具現する必要の爲めの戦争は當然之れを是認することゝなるのである、個人が自己と親祖と子孫とを全一系體とする思想信念は纏がて此全一系體の上に全眞を發揮せんとする偉大なる活動を起すべき根柢を築くものである。

四、個人は家を以て生存の本據とし夫婦を以て性能發現の單位となすものなることを  
理體す

一切の動物は深山原野土中水中に自然の儘に生息しつゝありて、各其形質と境遇とに適應して羽毛鱗甲爪牙等を有し、其性能發揮生

活運營の爲めに巢を造り穴を掘り網を張る等種々生存の本據を異にすと雖、人類は住家を以て生存の本據とす、蓋し動物の外界に對する防護は自然的に一身に具有し、人類の住家に於けるが如き必要を感せず、人類にも穴居時代あり又水章を逐ふて轉移したる蒙昧の時代ありて、一定の住家を構成するまでには幾多の變遷を経たるは明かなりと雖、要するに人類は他の動物の如く自然の儘にては生息し得ざる形質を有することが住家の必要を感せしめたる原因である、故に地熱の冷却或は風雨寒暑等氣候の變化周圍の事情機遇に適應して生活の安全を計るの必要を感じ、而して此必要に刺戟せられて之に對應する智性も亦次第に發達したるものである。

然れども爰に言ふ家とは單に物質的建築の家屋住宅のみを指すものにあらず、家の觀念には種族的觀念が主たる要素をなして居る、



同一住家の内に同一種族が同棲する即ち家を生存の本據となすといふことは、太古以來現代に至るまで殆んど不變の常經をなして居るのである、而して其子孫が繁殖するに及んで家族は分裂別居するといふことも亦た古今同型である、要するに個人は單身孤立せずして家を以て生存の本據とし、多數同棲して一家族を形成すると云ふとは人類自然の性能に出るもので、而して其家族は主として、同一系體をなせる自己と親祖と子孫とより成り、此一家族が即ち社會組織の單位をなすものである、隨て家は管に便宜上個人の生存の本據たるのみならず、個人の全眞發揮の上に於て必然的缺くべからざるものである、彼の出家遁世して思を幽玄に馳せ名利の慾を擺脫し大宇宙を内觀に收めて眞我の境に遊ぶ古の聖賢哲人、更に又一身を公事に投じ東奔西馳席暖かなるに違あらず以て一家を顧みぬと云ふ遠

人傑士の如き洵に欽仰すべきものありと雖是れ仰異常の性格を有する稀世の人にして始めて庶幾すべく、以て多數人類の規矩常經となすことを得ず、且多數の人々が出家遁世を以て此等特異の人の跡を模倣するに至らば、社會組織の根柢に龜裂を生じ、人類本性本能即ち全眞の發揮を期待し得ざるに至る、故に家を以て個人生存の本據となすことは古今に亘りて動かすべからざる事實上の常經たるのみならず、全眞活現の上に於て必須要件たることを認めねばならぬ、個人は家を以て生存の本據となすと同時に、また夫婦を以て一家の中樞となし、性能發現の單位とすべきものである、抑男女相愛による夫婦の結合は人類に限るものにして動物には之を認め得べからず、動物は繁殖の爲めに性慾あり、性慾の爲めには雌雄の結合を見るのみ、性慾を除いては雌雄の愛なるものなし、然るに人類は管に



性慾及び繁殖の爲めのみならずして、男女兩性が各其異なる性能によりて全眞を發揮する上に於て男女の相愛夫婦の結合を必要とするのである。嚴格の意味に於て個人と云ふときは男性は男性のみ、女性は女性のみにては全きものにあらず、男女兩性夫婦の結合によりて始めて完全なる個人と云ひ得るのである。廣く人類と云ふときは男女の一方のみを指して差支なきも、社會的に個人と稱するときには夫婦の一方又は双方を指稱することとなる。單に動物、若くは生物、物的の意味に於ての人類と社會的の意味に於ける個人とは其間に截然たる區別を設けねばならぬ。

而して男女の相愛性は原形質保持の必要上人類の必然的に具有する所である。單獨孤立なる男女の一方だけでは原形質を保持し全眞を發揮すること能はず、男女兩性夫婦の結合によりて始めて全眞を

具現し原形質を全からしむることを得るのである。故に男女相愛は全眞に適ふ全きものでなければならぬ。而して全き愛は一夫一婦に限るものにして愛の分割は全きものでない。既に男女相愛は全きことを要し分割すべからざるものなりとせば、一夫一婦の眞理に適ふものたることは明かにして一夫多妻若くは一妻多夫なるものは何等か特別の事情に基く變態と認めねばならぬ。蓋し人類の性能は處を異にするも常に同一なりと云ふことを得ず、熱帯地方と寒帯地方とは自ら性能發現を異にするものにして隨て夫婦關係も亦自ら異ならざるを得ず、熱帯地方は多妻主義に寒帯地方は多夫主義に傾く、是れ固より種々の事情に起因するものなりと雖要するに何れも偏せるものにして即ち全眞的中正を得たるものとは稱するを得べからざる所である。要は一夫一婦の結合にあらざれば全眞的愛の發現を期す



ることは不可能と言はなければならぬ。

夫婦以外に妾を認むるは専ら性慾又は子孫繁殖の必要より出でたるものにして愛の問題と直接の關係あるにあらず、夫婦間に直系の子孫を缺く場合には其缺陷を補充するが爲めに妾を許容するは格別なるも、其直系子孫あるにも拘らず妾を蓄ふるは是れ性慾の奴隷たるものにして殆んど獸性に近きものである、其種々の事情により結婚し得ざる男女が夫婦以外の關係に於て其性慾を充たすと云ふが如きことも人としての常經を逸したるものにして全眞的愛の問題とは没交渉のものである、夫婦關係は何人かの創案に出でしといふにあらず、又利害關係のみによりて發生したるものにあらず、實に性能發現の單位として自然的に人類社會の動かすべからざる常經となれるものである、隨て獨身主義の如きは絶対に排斥する所たるは勿論

である。

純理的嚴密の意義に於て全眞的愛は分割すべからざるものである、而して貞操なるものは此分割すべからざる愛の上に成立するものである、爰に全眞的愛とは肉體的精神的又靈的に一致融會して生ずる所の愛を指稱するのであつて、即ち理想的夫婦關係は管に精神及肉體に於て二者同一體たるのみならず、靈的に於ても亦同體たるに由て生ずるものである、彼の寡婦の再婚は愛の全眞を保つ所以の道でない、貞操を破ると云ふは此全眞的愛を破壊するの謂に外ならず、隨て悔悟するも恢復することは不可能である、悔悟は精神的の發動にして精神上の瘡痕は治癒するを得べきも以て肉體的及靈的の瘡痕を治癒することは不可能である、純理的批判の上に於ては全眞的愛を基礎とする貞操は男女共通平等のものならざるべからず、然るに



古來獨り女子にのみ之を認めて殆んど男子の貞操を認めざるが如き、是れ甚だ不公平なるに似たるも亦別個の理由なきにあらず、抑男子は活動力旺盛にして女子は之に及ばず、而して一家を保持する上に最も必要なるは經濟的實力にして、之を充實するは男子の活動力の旺盛なるに期待しなければならぬ、即ち一家經營の根據は男子の活力にして、女子は助成的努力をなすに過ぎず、男子は經濟力を集積充實し女子は之を消費すると云ふ關係に於て男子は一家の主位家長たる位地を占め、女子は從屬的位置に立つこととなる、此活動力の相違主從の關係よりして獨り從屬的女子にのみ貞操を強要し、而して家長たる男子は貞操を強要せらるることなく全く開放的習慣を作つたものである、勿論全眞の愛といふことは活動的實力の相違や又主從的關係とは全く別問題なるも、而かも夫婦の共同體は愛のみに

よりて圓滿に存立發展し得るものにあらず、一家の經營宜きを得て始めて愛も全眞を發揮し得るのである、然るに既に述ぶるが如く活動力旺盛なる男子は一家經營の根抵たる經濟的實力を供給して家長たる最大權力を掌握するが故に、從屬的女子は此家長の自由意思を左右する能はず、即ち男子には貞操を強要し難き狀勢となり、女子のみ獨り貞操を強要せらるゝは當然の勢といはなければならぬ、此別方面より由來する不公平なる習慣は遂に女子にのみ嚴にして男子に寛大なるを通義とするに至つたものである、  
如上男女間に不公平なる貞操觀を生せしは主として男女活動力の相違より生ぜし主從關係が自然習慣となりて發現せしものなるも、尙他に重大なる理由の存するものがある、他なし第一女子が貞操を守らざる場合に於ては其女子を中心として、親祖と子孫とを連繫する



全一系體を危殆ならしむるに反して、男子が貞操を省みずとするも女子に於けるが如き全一系體を危殆ならしむる患がないからである。若し男子が夫婦以外の女子との關係に於て子女を擧げたりとせんか、是れ全一系體の枝葉分派を生せし、までにして全一系體の上に破壊混亂を生せしむるが如きことなし、是れ男子の不貞操を深く咎めざる所以である。斯の如く女子の不貞操は全一系體上に危険を伴ふ恐れあるに反し男子の不貞操の場合には之れなきが故に勢ひ女子にのみ嚴にして男子に寛大なるの結果となりしものである。然らば男子の不貞操は是認して可なるかといへば決して然らず、理想的夫婦關係は全眞の愛を以て基礎としなければならぬ、故に此全眞の愛を蔑視する男子の不貞操は寛假すべきものではなく、隨て理想としては嚴密なる一夫一婦にあらざれば是認すべからざるものである。

純理の上より論すれば斯の如しと雖活社會に處する上に於て純理一偏のみを以て律し能はざる場合なきにあらず、於是乎此純理を基準標的として時代及び境遇に適應するの行動を撰擇しなければならぬこととなる、要するに太靈道に於ては貞操又は愛の一面に固着して却て大なる人生の全體を輕視するが如きことなく、如何なる場合に於ても超越的靈理の上より斷定を下して機宜の裁制に出づ是れ道徳と大に趣を異にする所以である、例へば寡婦の場合全眞的愛の一面よりすれば再婚は絶對に否認すべきであるが、併し人類は愛のみによりて生息し得るものにあらず、若し愛のみによりて生息するを本義とせば夫の死する場合妻は殉死するを當然とし、妻の死する場合も亦夫の殉死を要することとなる、然れども愛は本來人生の一面たるに過ぎずして全面ではない、隨て其一面たる愛の爲めに人生の



全、面、を、覆、ひ、遂、に、之、を、破、壞、し、て、も、顧、み、ぬ、と、云、ふ、行、動、は、人、生、と、し、て、の、全、真、を、發、揮、す、る、所、以、で、な、い、。例、へ、ば、情、死、の、如、き、唯、た、單、に、愛、と、云、ふ、一、面、の、み、に、就、て、論、ず、れ、ば、指、摘、す、べ、き、瑕、疵、な、き、の、み、な、ら、ず、寧、ろ、稱、揚、す、べ、き、も、の、で、あ、る、か、も、知、れ、ぬ、。而、か、も、爲、め、に、人、生、の、全、真、を、空、ふ、す、る、に、至、て、は、之、れ、を、是、認、し、得、べ、か、ら、ざ、る、所、で、あ、る、。畢、竟、愛、の、一、面、に、の、み、執、着、し、て、人、生、の、全、面、を、忘、却、す、る、に、至、つ、て、は、絶、對、に、排、斥、し、な、け、れ、ば、な、ら、ぬ、と、同、時、に、情、死、の、如、き、愛、は、即、ち、愛、た、る、も、而、も、決、し、て、全、真、の、愛、と、は、稱、し、得、べ、か、ら、ざ、る、も、の、で、あ、る、。

愛の神聖なる理由として自由結婚を主張するは全真的愛の一面よりすれば固より是認すべきであるが、之が爲めに一切を犠牲として人生の全面を没了するに至ては、其無分別なる殆ど情死と擇ぶ所がないのである、且其所謂神聖の愛なるものには疑ふべきもの多く、

一時的血情に驅られて盲目的に愛の一面に突進して以て自ら神聖を呼號するに至ては實に噴飯すべき滑稽事といふべく、其多くは熱情忽ち冷却して再婚三婚するに至る何處にか永久的に愛を認むるを得ん、自由結婚の害毒を流すは多く此徒輩である、之に反して舊時代に行はれたる強制的結婚即ち眞愛の生せざる男女を他より強制的に結合せしめて理想的夫婦たらしめんとするは餘りに愛の純理を蔑視したるものといはねばならぬ、唯愛は動もすれば情に奔り易し、理智の光りによりて之を裁制するに至りて始めて全真的愛と稱し得るのである、畢竟理智の光りに照らされたる愛にあらざれば全真的愛といふことを得ぬ、而して理智の光りを全からしめんには冷靜なる他人の助言に俟たざるべからず、是れ媒酌者を以て結婚の一要素とすることが最も安全且中正を得たるの方法として認めらるゝ所以で



ある。勿論理智を伴ふ愛即ち全眞的愛に出る自由結婚に至ては指摘すべき寸隙の缺點だも見出す能はず。然るに自由結婚に對して非難の起るは蓋し全眞的愛に基かざるもの多きが爲めである。されば夫婦はたとへその結合の徑路順序を異にすと雖須らく全眞の愛を發揮して以て性能發現を全眞ならしむることを念としなければならぬ。之れを要するに個人が生存の本據として家を經理し、性能發現の單位として夫婦結合するは全く人類性能の自然に出づるものであつて、こは實に前項述ぶる所の個人と親祖と子孫と共に全一系體を爲し、原形質を保持し全眞を發揮する上に於て必然起り來るべき現象にして、個人は先づ家を以て生存の本據とし夫婦を以て性能發現の單位と爲し、茲に其全眞を發揮しなければならぬのである。

### 五、個人は萬物の帥長たることを理體す

古來人類は萬物の靈長であると云ひ來れるが、茲に云ふ萬物の帥長とは大に意味を異にする所がある。佛教も萬物に佛性あるを認め草木も成佛すといひ萬法即眞如と云ふが如く、萬物の體性的方面より見れば靈性を具有することゝなる。太靈道に於ても靈子は萬物を創發化育すると共に、萬有一切に遍滿すとなすが故に萬物にも靈性あるを認め、而して其中に立て人類は最も優秀で靈性に富んで居るとするが故に人は萬物の靈長なる位地を占むると云ふことは固より認むべきであるが、併し單に靈長であると云ふのみにては事實を有りの儘に表白したるまでいあつて何等其間に人類對萬物の關係的意味を含んで居らぬのである。然るに爰に萬物の帥長であるといふは



人類は萬物を帥ひ又は統率して其首長となりて向上發展するといふ意味を有し、隨て一面には萬物を創發、化育せしめつゝ萬物をして自己と共に向上進展を遂げしむると云ふ責任と、又一面に萬物を帥ひて向上進展を圖る上に於て必要な場合は萬物を行使利用し得ると云ふ權理とを生ずるのである。

從來の靈長的觀念には萬物を育成して俱に共に向上進展を期するといふ首長としての責任の意味が缺けて居る、而して又た多數の人類は恰も萬物は人類の利便の爲めにのみ作られしが如く考へ、萬物に對し絶對的に生殺與奪の權を有するものとし、其結果萬物を虐使濫用して顧みぬと云ふ傾向を生ずるに至るのであるが、之れに對し宗教道德の方面に於ては仁、慈悲、愛と云ふことは常に人類間のみならず有ゆる生物にも推及すべきものなりとの趣旨を叙ぶるも、

而も仁、慈悲、愛情を有つと云ふことは單に人々の心懸け即ち自己自身の修養的方面のことに限られて進んで萬物を育成して共に進展の道に向はしむると云ふやうな宇宙的偉大なる觀念とは没交渉である、且仁、慈悲、愛と云ふことにのみ偏執する時は極端に走り遂に人類間の戦争を非認するは勿論、毒蛇惡獸害蟲を殺すことも能はず、漁獵も不可青草を踏むことも能はぬと云ふやうな今日の活社會に處する上に於て動きの取れぬ窮境に陥るのである。

爰に萬物の帥長といふことは如上の萬物を虐使濫用するも差支へずと云ふ專斷主義又は極端なる慈悲仁愛主義を唱ふるものではないのであつて、即ち萬物を帥ひ人類自ら長となつて以て統率育成しつゝ向上進展し茲に全眞の發揮を完成するに至るべきことを意味するのである、併し人類が此萬物を帥ひ即ち統率育成しつゝ共に向上進



展を期すると云ふことは、萬物の生存状態に照らして幾多の難問題を惹起し來るのである、熟々萬有の生滅起伏の状態を見るに、生存競争自然淘汰は旺んに行はれ其結果は云ふまでもなく優勝劣敗適者生存に歸するので、育成は愚か萬物互に相反噬し他を取つて自ら食し自らの利便に供するといふ有様にして、一面より見れば慘劇を演じつゝありといふも可なるのである、此間に立て人類は毅然として萬物の帥長を以て自ら任じ萬物を育成統率しつゝ、大宇宙進展の目的に契合せしめんとする太靈道の真趣は人々をして大自覺を起さしむるにあらざれば實行し難き所である、而して此目的此主義の下に吾人日常の行動を律するに當り第一の問題は食物である、吾人の食物は動植物によらねばならぬが動植物より食物を取ると云ふことは即ち萬物を育成する主旨と背馳することなきか、若し背馳するとして

食物を取ること能はずとせば茲に人類は自己の生命を保持し難きに至るのであるが、是に於てか始めて人類は單に萬物の靈長たるに止まらず、眞に萬物の帥長たる深甚鴻大なる意義を生じ來るのである、何となれば人類は萬物の帥長たるが故に一方に萬物を育成しつゝ、全眞を發揮し向上進展を期すると共に、一方には此大責任を果す爲めに必要な場合には萬物を利用行使するの權理を生ず、即ち萬物育成の責任と共に萬物利用の權理を生ずるのである、此結果或は萬物を取て食と爲し又は萬物を利用行使することは人類が萬物の帥長たる當然の權理なのである。

斯くの如く人類は萬物の帥長であつて隨て虐使濫用を慎み、適法に萬物を行使利用することは人類の責任に附隨する當然の權理たることを認めなければならぬ、是れ恰も一國の主權者が國民を統率し



て國家の目的を達成するの責任あると共に、此重大責任に附隨して國民に命令し國民に絶對的服従を強制するの權理を生ずると同様である、而して國家に在ては國民は個人と云ふ小生命を捨て、國家といふ大生命に一致することの必要なる場合がある、此小なる個人生命が大なる國家生命に融合一致すると云ふことは即ち取りも直さず自己の向上進展となるのである、故に若し何等か自己の小生命を捨て、國家の大生命に一致すべき機會例へば戦争等の場合ありとせば、之を大なる名譽として即ち向上進展の絶好機會を得たるものとして満足を以て努力すべきである、之と同様に動植物は勿論礦物に至るまで人類の爲めに行使利用せらるゝは是れ取りも直さず彼等の小なる生命が人類の高等なる生命と融合一致して生命の向上進展を來すの結果となる、即ち人類に利用せらるゝ是等動物、植物、礦物の小

生命體は其小生命を棄て、大生命と一致するの意義に適ふのである、而して此自己の小生命を捨て、大生命に合致すると云ふこと、犠牲的觀念との間には大なる徑庭あることを認識しなければならぬ、犠牲的觀念には自己の本意にあらざるも止むを得ずとの意の含む、即ち未だ自我充足の境地に達せざるものである、例へば國の爲めに戦死するは本意でないが國家の權力に強制せられて止むを得ず従軍するといふならば是れ未だ以て大生命と一致して向上進展し得ると云ふ自覺も満足もあらざるものにして、恰も動植物が何等進展の意義を解せず或は其意に反して人類の爲めに利用せられながら知らず識らず進展しつゝあると同様のものである、而して之を大生命に合致して向上進展し得ると云ふことを自覺し満足し得たる場合に對比すれば其間に大なる徑庭と價値の相異とを認めなければならぬので



ある、故に敢て犠牲と云ふことを排斥せざるも、而も人類は犠牲的  
觀念以上に更に自我充足の完全なる理想境に進むことを期さなければならぬこととなると共に、萬物が人類の爲めに利用行使せらるゝは是れ決して人類の爲めに犠牲となるにあらずして、寧ろ萬物の自我充足が人類に依りて完成せらるゝものと解すべきである。

之れを要するに個人は萬物の帥長なりといふは、即ち單に萬物の  
靈長といふが如き人類と萬物との比較の意味にあらずして、實に人  
類は萬物を帥ゆる所の長たる責任を有し、同時に之れを育成發達せ  
しめ、利用行使を爲して以て茲に大生命の全眞的發達進展を遂ぐる  
ことを期さなければならぬことを謂ふのである。

第四輯 論 纂



## 太靈道・靈理學・靈子術

太靈道は宗教にあらず、道德にあらず、哲學にあらず、科學にあらずして是等過去世代に在りて人類世界に發現せる有らゆる思想學術を包括超越す、而して宗教に對しては其源泉たり、道德に對しては其根本たり、哲學に對しては其基礎たり、科學に對しては其歸着たり、即ち太靈道は宗教以上道德以上哲學以上科學以上に超越して、而も是等の思想學術を包括したる總合的大統本源たるべきものなり、何れの思想學術も在來に於ては唯單に一枝葉一部分を説述研究したるに止まり相互に背反せるやの觀あるも、太靈道に在りては如何なる思想如何なる學術も咸な悉く大攝理の中に調和されて些の矛盾相反を發見せず、されば宗教家は曰く太靈道は即ち是れ宗教の極致な



りと、道德家は曰く太靈道は即ち是れ道德の規準なりと、哲學者は曰く太靈道は即ち是れ哲學の真髓なりと、科學者は曰く太靈道は即ち是れ科學最終の到達點なりと、即ち知る可し枝葉部分たる宗教・道德・哲學・科學の總ては悉く太靈道の中に包括せらるゝことを、更らに奇とすべきは宗教家の中に在りても佛敎者は曰く太靈は眞如と同一なりと、基督教者は曰く太靈はゴツドと同一なりと、而して神道者は曰く太靈は天御中主と同一なりと、然るに彼等佛者と基督者と神道者とは常に其本尊敎義を異にすと稱し反目敵視するに拘らず、獨り太靈に對してのみ敍上の如くなるは如何に太靈が絶對の超越なるかを知ることを得ん、然れ共嚴密なる意義に於て太靈は決して眞如・ゴツド又は天御中主と必ずしも同一視すべきにあらず、唯だ彼等が超越的思想を有せざるが故に遂に己れの尺度を以て他を量

るに過ぎざるも、而も眞如も、ゴツドも、天御中主も思想として太靈的思想の一部片鱗なることは言ふまでもなし、即ち何れも枝葉部分にして未だ其根本に觸れざるも畢竟太靈に包有せらるべきものたるなり。

太靈道は既に總ての思想學術の大統的根柢たるが故に、單に之れを敎又は學と唱へず即ち「道」と稱す、道と云ふも固より道德に於ける狹義の道とは其意義全然相異なる、而して太靈道の中に自ら學及び術を具有す、其學を靈理學と稱し其術を靈子術と名づく、蓋し太靈道と言へば直ちに靈理學も靈子術も共に包含さるゝなれど、説述宣傳の便宜上道の下に學及び術を分別す、即ち道の根柢には學なかるべからず、學あれば其應用即ち術なかるべからず、太靈道は思想を司り、靈理學は學理を極め、靈子術は應用に任ず、靈理學・靈子術協



持して太靈道の思想を實人生の上に具現し體化し、將ちて始めて人類を至全理想の境地に導かんとす、過去の宗教及び道德には學なく、偶々學あるも術なく、術あるも學なく、哲學には道なく、術なく、科學には道なく、術あるも單に純物質的のものにして茲に云ふ術といふの類にはあらず、孰れも一方にのみ偏倚して以て完全なりとは稱するを得ず、然るに太靈道は實に人類に超越的思想を與へ、靈理學は萬有の本源を理論的に究明して一面思想の根柢を爲し、靈子術は靈理學を直ちに實人生に應用具現して以て各人の心身を改造し、靈性を顯輝し靈能を啓發せしめて人類をして即ち人類以上の超境に導く、斯くの如くにして人類は始めて至全の域に到達することを得べきなり。

太靈道にいふ太靈とは宇宙根本の大實體を總體的に觀察したるも

のにして、實に超劫超邊超在超非在たり、宇宙は即ち此超劫超邊超在超非在たる太靈の顯現にして、「太」とは大小差別の比較を絶し大にあらず太にして「靈」とは物・心・萬有の根源を意味し、而して「道」は萬有及び萬有の根本總べてに通じ行はるゝ所の道則を意味す、即ち「太靈道」とは絶・對・超・越にして萬有の根本たる所の靈の道則」といふの義に歸着す、次に靈理學とは在來物質界の有らゆる現象に對しては物理學の原則を以て解釋し、精神界の總ての現象に對しては不全ながらも心理學の原則を以て解釋し、而して學者の多くは宇宙の現象は物質及び精神の二元以外に何物をも認めざりしと雖、事實上に於て物質作用にもあらず、精神作用にもあらざる現象あり、たとへば靈子作用の如き即ち是れにして、實に靈子作用の現象は到底物理學若くは心理學に依りて解釋し得べからず、於是乎、物質界に於



ける物理学、精神界に於ける心理学を超越して靈界に於て新に靈理學を創建するに至れり、而して靈子術は靈理學の具現應用にして、靈子は精神・心靈・靈魂・スピリット等の形而上的方面に偏したる實質と全然相異り、更に元素・元子・電子等の形而下的方面にのみ倚りたる實質とも亦た同じからず、實に形而上形而下兩面に通じて精神・物質二元の根本原質たる大實體を意味し隨て其作用は萬有現象の根本作用にして、精神作用物質作用共に靈子の作用に原因し之れに支配さる、靈子術は此根本的なる靈子作用を精神・物質の結合體たる生命現象の上・的確に應用する所の法術にして誰人も修得具現することを得。今や時代人の思想は何等の統一中心なく、甚しき混亂蕪雜の狀に在り、而して學術また徒に唯物主義に偏倚して人自ら生命の真相を正解するに至らず、況んや周圍の萬有現象に對しては遂に其實義を

觀取するもの殆んど之れあるを發見せず、恁くの如くにして人類は益々昏迷に轉倒せんとしつゝあり、此機に際し太靈道の思想と靈理學の學理と靈子術の作用とは、正に時代人を啓導して至上の光明を與へ至全の靈境に到達せしむ、人類は須らく此光明に浴し此靈境に入らざる可からず。

## 太靈的自覺

人は須らく自覺せざるべからず、而も太靈的に自覺せざるべからず、茲に太靈と云ふは心にあらず物にあらず、心物二元を超越して而して心物二元の根本原因となるべき絶對を指して即ち太靈と稱す、思ふに過去世代に於て人類を支配したる思想の二大潮流は唯心主義



と唯物主義とに分別され、唯心主義は有神論に傾き唯物主義は無神論に陥る、唯心是か、唯物非か、有神可か、無神否か、人は唯心唯物の岐路に彷徨し、有神・無神の分界に昏迷して竟に將さに其歸點を發見し得ざらんとす、宗教は唯心に立脚して有神を教へ、科學は唯物に根據して無神を唱へ、哲學は唯心唯物、有神・無神を是非して根本原理を探らんとするも未だ光明を得るに至らず、道德は唯だ是れ時處に適應する方便と認められて曾て絶對の眞理を示さず、人は宗教に入るべきか、科學に従ふべきか、將た哲學に依るべきか、道德に趨くべきか、宗教是ならざるにあらず、而も未だ完ならず、科學非なるにあらず、而も未だ全ならず、哲學可ならざるにあらず、而も未だ眞ならず、道德非なるにあらず、而も未だ理に至らず、宗教も科學も、哲學も道德も共に等しく是れ未だ以て全眞完理の大道に

到達せざる也。

然れ共人は一日も自覺なかるべからず、自覺なき生活は畢竟無意義のみ、無價値のみ、自覺ありて始めて人生に意義生じ價値現はる、於是乎人は果して何に依りて自覺を穫取成就することを得べきや、そは一に全眞完理の大道に歸入するに在り而して既に唯心唯物・有神・無神、宗教・科學・哲學・道德共に是れ未だ是非可否の岐路分界に彷徨昏迷して全眞に到らず完理に達せずとせば、何れの處にか所謂全眞完理の大道を覓むることを得べきか、今の時は實に世を擧げて此大道の展開發現さるゝを翹望して歎まず、此機に方り地上東方の島帝國に發現せる太靈道は正に心を認め物を認め、有神・無神を融會し、宗教・科學・哲學・道德を包容超越して全眞を顯揮し完理を含藏す、洵に是れ時代を啓導するの大道にして人類に自覺を與ふる光明たり、世衆



此大道に歸入し以て自覺を獲取成就せば、茲に始めて彷徨昏迷より離脱し人生の眞意義を實現し其眞價値を顯彰することを得るに至らん、此太靈道は心物二元を認むるが故に宗教の如く唯心有神に偏せず、科學の如く唯物・無神に陥らず、勿論哲學の如く唯理に倚らず、又た道德の如く動搖的ならず、實に全眞・超越・絶對・完理の太靈を理信し、心物二元は此太靈より創化發現し來りて萬有の生命現象を生出するに至るものと觀ず、されば太靈は心にあらず物にあらずして心物の根本原因たり、而して萬有の生命は心物二元より成立す、否寧ろ萬有生命は心物兩面を具有す、而して此二元二面は其根元を太靈に發するが故に、心を以て直ちに生命の實相なりとすべからず、また物を以て生命の實體なりと爲し得べからず、全く生命の實相實體は太靈に在ることを知らざるべからず、之と共に心物二元より成り

心物二面を有する所の生ある人類は、其自覺に於ても亦た宗教者の如く唯心有神的ならず、科學者の如く唯物・無神的ならず、將たまた哲學者の如く唯理的ならず、道德者の如く動搖的ならずして、須らく是等の總てを包容超越したる根本的自覺ならざるべからず、原因的自覺ならざるべからず、即ち太靈的自覺ならざるべからざる也、人一度び超越絶對の太靈を理信し、根本的・原因的・太靈的の自覺に入ることを得ば即ち心に拘泥せず、物に支配されず、心物を超越包容して全眞性・完理性・絶對性・創化性を具現することを得るに至るべし、人生の根本義は超越包容に在り、人生の眞歸點は全眞・完理・絶對・創化に在り、人は須らく凡てを超越せざるべからず、總てを包容せざるべからず、凡てを超越し總てを包容して而して全眞を發揮し、完理を實現し、絶對に歸入し、創化を成就せざるべからず、超越・包容・全



眞完理・絶對・創化共に之れ等しく太靈的自覺に依りて獲取顯彰せらる然らば如何にして太靈的自覺に入ることを得べきか、思ふに自覺せざれば自覺に入ること難し、而して太靈的自覺の内容は超越に在り、包容に在り、全眞に在り、完理に在り、絶對に在り、創化に在り、超越・包容・全眞完理・絶對・創化の是等總てを自覺すること即ち直ちに之れ太靈的自覺にして、太靈的自覺即ち直ちに之れ超越たり、包容たり、全眞たり、完理たり、絶對たり、創化たるなり、之れを以て太靈的自覺を獲取成就せんと欲する、則ち須らく超越せざるべからず、包容せざるべからず、全眞ならざるべからず、完理ならざるべからず、絶對ならざるべからず、創化ならざるべからず、また超越・包容を獲取し、全眞完理・絶對・創化を成就せんと欲する、則ち須らく太靈的自覺を爲さざるべからず、而して自覺せざれば自覺に入ること難

く、之れと共に超越せざれば超越を獲ること難く、包容せざれば包容を得ること難く、全眞ならざれば全眞を得ず、完理ならざれば完理を得ず、絶對ならざれば絶對を得ず、創化せざれば創化を得ず、茲に至りて總ての人は超越・包容を獲取し、全眞完理・絶對・創化を具現して以て太靈的自覺を成就せざるべからざる也。

## 超 越

諸れを縦に觀すれば超窮の時劫に繋がり、焉れを横に眺むれば超限の空際に懸る、既に超窮の時劫に繋る、觀するも即ち心に印せず、已に超限の空際に懸る、眺むるも則ち眼に映せず、玄たり、如たり、今之れを茲に太靈といふ、觀じて心に印せずと雖玄如を覺知す、眺



めて眼に映せずと雖太靈を自識す、心に印せずして覺知する妙性、眼に映せずして自識する妙能、是れ抑も亦た何に由りてか來る、洵に玄如太靈と妙性妙能と共に之れを捕へんと欲して捉ふべからず、また捕へんと欲して捉ふべからず、即ち捕ふべからずと雖時劫空際此れに依りて創まり、則ち捉ふべからずと雖心知眼識之れに由りて化す、玄と云はんか、妙と曰はんか、言茲に竭き、辭爰に盡く、即ち言の以て表はすべき無く、辭の以て現はすべき莫しと雖此れを言ひ、之れを辭はざれば腦頭、胸臆、肚裏、足心自らに我をして此れを言はしめ且つ辭はしむあり、即ち言はしめ且つ辭はしめて曰く、「超越」！ 吁、此れを言はしめ且つ之れを辭はしむる所のもの眞乎是れ何なるべきか、顧みて影を見ず、省みて形を認めず、嗚呼是れ果して何なるべきぞ、

超窮の時劫に繋がり、超限の空際に懸りて、觀するも心に印せず、眺むるも眼に映せず、捕へんと欲するも捕ふべからず、また捉へんと欲するも捉ふべからず、言の表はすべき無く、辭の現はすべき莫く、顧みて影を見ず、省みて形を認めざるもの、是れ即ち超越の眞趣たるにはあらざるか、之れ即ち超越の妙諦たるにはあらざるか、然れ共思へ超越畢竟容詞のみ、超越の本眞主體こそ茲に極めんと欲する對照たるなれ、何ぞ形而容詞に拘らん、進んで其本眞主體を究盡せざるべからず、而して超越と云ふ既に形而容詞に過ぎずとなす、併も超越の意味する處に其本眞主體を彷彿せしむるあり、即ち超越を離れ超越を除きて本眞を尋ね主體を討ぬること難し、之を以て先づ須らく超越を知り超越を解せざるべからざるに至る、如何なるをか是れ超越とは謂ふぞ、



我れ今塊然として天地の間に立つ、周圍環境凡總萬有我れを掩ひ我れを包めり、我れ今覺然として自己の在るを知る、自我心身凡總諸欲我れを動かし我れを唆る、周圍環境凡總萬有我れを掩ひ我れを包むの時、我れは即ち周圍環境凡總萬有の爲めに支配せらる、自我心身凡總諸欲我れを動かし我れを唆るの時、我れは自我心身凡總諸欲の爲に拘束せらる、周圍環境凡總萬有の爲めに支配さるゝこと斯くの如く、自我心身凡總諸欲の爲めに拘束せらるゝこと憊くの如からんには之れ我れは是れ眞の我にあらず、否我なるものあることを認め得べからざるに至るなり、眞の我にあらざる我、認め得べからざる我我れは是れ遂に眞の我にあらざるか、我れは之れ竟に我を認め得べからざるか、然り凡てに支配され總てに拘束せらるゝ我は遂に竟に眞の我を認め得べからざるなり。

然れ共若し夫れ人一度び超越に入らんか、濶然として始めて眞の我を知り、我を認むることを得るに至るべき也、超越と何ぞ、即ち周圍環境凡總現象に支配されず、自我心身凡總諸欲に拘束せられざるを云ふ、何物にも支配されず、何物にも拘束されずして茲に眞我を認む、而して何物にも支配さるゝことなくして何物をも創出し、何物にも拘束さるゝことなくして何物をも生化するに至りて超越の意義全し、茲に於て乎即ち知る超越とは單に周圍環境凡總事物に支配さるゝことなき消極的意義に限らずして何物をも創出すべき積極的意義あることを、又た識る自我心身凡總諸欲に拘束さるゝことなき消極的意義に止まらずして、何物をも生化すべき積極的意義あることを、此支配されずして創出し拘束されずして生化する是れを之れ眞我と認むべきなり、嗚呼眞我こそ全く超越す。



真我既に總てを超越す、然りと雖此真我は既に總てを超越せるが故に我の真我に非ず、又た真我の我に非ず、若し是れを我の真我と云はゞ其我は之れ個性の我に非ず尙し此れを真我の我と言はゞ其我は之れ個別の我に非ず、我の真我、真我の我、全く總てを超越して時間を以て計るべからず、空間を以て量るべからず、長短大小の差別を超越す、此超越是れ真乎玄如太靈たることを知るを得べし、茲に至りて太靈即真我、真我即太靈たるべし、洵に太靈は超越なると共に、真我の超越は太靈の超越たり、太靈の超越は真我の超越たり、即ち總ての支配と拘束とを離脱して而して總てを創出生化す、萬象の現出人類の發生、共に等しく超越創化に依る、超越せざれば創化なく、創化なければ超越なし、人類よ！真我即太靈、太靈即真我の境に入り須らく超越して而して創化せよ、創化して而して超越せ

よ

## 超我と無我

太靈道に於て超我と云ふは彼の佛教等に於ける無我の意味と往々にして混淆し易きも、而も其内容に在りては全然彼此相異なることを知らざるべからず、則ち無我と云ふ時は我としての精神を忘れ、また我としての肉體を忘れて、唯だ維れ絶対、唯だ是れ佛神、絶対、佛神此の以外に何物をも認めず、何事をも感せざるの境地を謂ひ現はす、之を以て或は能く絶対に坐するを得ることありと雖、遂に差別を照觀せざるが故に、其結果の歸する所は自らの精神を卑しむ、己れの肉體を忌み、進んでは周圍を輕んじ、現世を厭ふの心情を發



露し來る、斯の如く自己の精神我を卑下して昂めて之れより脱却せんことを欲し、また自己の肉體我を厭忌して勉めて之れより遠離せんことを希ふに至りて却て自我心身の爲めに左右され支配せらるゝを免れず、既に却て自我心身の爲めに左右され支配せらるゝが故に益々絶對より遠く、益々佛神より離るゝの結果を生ず、絶對より遠く佛神より離るゝが故に茲に於てか煩悶生じ、爰に於てか懷疑起る、煩悶と懷疑、懷疑と煩悶の間に往々來々して究極竟に其歸着を失ふ、古來無我の境に入らんと欲して煩悶に陥り、懷疑を重ねるに至るもの徒らに多くして所謂無我到達し得たるもの殆んどあることなし、若し無我到達し得たりと自ら信するものありと雖、そは夢幻にも等しく泡沫にも同じき境涯にて之を以て直ちに絶對に入れり、佛神に會へりと稱するを得べからず、無我とは恰も夫れ水中に映する我

が影の如く我が影を掴まんと欲せば先づ我が自體を掴まざるべからず、無我に入らんと欲せば則ち須らく先づ我が心身に立脚せざるべからず、我が自體を離れて我が影なく、我が心身を離れて無我に入ること難し、我が影は我が自體に在り、無我は我が心身に有り、換言せば欲する所の絶對は固と是れ我が心身より離れたるものに非ず、希ふ所の佛神は素と之れ我が心身と別なるものに非ず、此故に絶對は之を内に求めざるべからず、佛神は是れを我に覓めざるべからず、内に求むること莫く我に覓むることなくして外に干め他に索む、無我を得ずして妄我に墮するに至る。

無我の境地に入らんと欲するもの、畢竟心我を棄て體我を捨つるが故に却て無我を得ること能はずして妄我に陥ること恁の如し、而して茲に超我と曰ふは是れ決して無我の如く心我を棄てず、體我を



捨てず、固より絶對を外に干めず、佛神を他に索めず、寧ろ之れと反對に心我を顯輝し體我を發揮して以て絶對を表はし佛神を現はさんことを期するもの、而して其絶對佛神の表現を靈我といふ、此靈我の完成せられたる状態を指して則ち之を超我と稱する也、されば超我は心我、體我の上に建設せられたる靈我の完成状態をいふものなるが故に、心我と離れず體我と別ならず、却て體我の完成即ち超我は全真なる心我、全真なる體我を基礎とせざれば、得て期し易からざるに至る、既に超我は全真なる心我、全真なる體我を基礎としたる靈我の完成なるが故に、超我の境域に入らんと欲する場合に在りては、先づ心我と體我と共に全真なることを要す、然らば如何なる状態を指して心我、體我の全真といふを得べきかといふに、凡そ心我即ち精神我も、また體我即ち肉體我も共に其本來は全真なるべ

き筈のものにして、即ち本來の心我其儘本來の體我其儘ならば之れを直ちに全真自我と稱し得べき也、更らに一層適切に言ひ顯せば靈我は本來全真なり、全真なる靈我は常に心我及び體我の上に流行作能しつゝあるものなるが故に、其全真靈我が心我及び體我の上に完全に流行作能しつゝある場合に於て、即ち心我の全真及び體我の全真を認むることを得、若し心我及び體我の上に全真靈我の流行作能不完全なる場合に於て、即ち心我及び體我は全真ならざること歸着す、全真ならざる心我及び體我の上には固より靈我は完成さるゝものに非ず、隨て超我に入ること難し。

靈我は全真なる心我及び全真なる體我の上に建設せらるゝも、而も心我の全真及び體我の全真は其原因する所靈我の全真に在るが故に、心我の全真及び體我の全真と靈我の全真とは相互に聯關連脈を



形織しまた交互に原因たり結果たり、結果たり原因たるの關係を固持す、されば究竟靈我の全眞、心我の全眞、體我の全眞に依りて始めて超我に歸入するものといふことを得、然らば如何にせば靈我、心我、體我の全眞を期して超我に歸入し得べきかといふに、元來靈我は實體性なるも、心我及び體我は現象性なるが故に、心我及び體我は常に周圍環境の爲めに左右され支配さるゝことを免るゝを得ず、更らに心我自體及び體我自體の爲めにも左右され支配さるゝに至る、既に心我及び體我が周圍環境並に心我自體及び體我自體の爲めに左右され支配さるゝに於ては靈我も亦た其全眞の發露作能を心我及び體我の上に完全に及ぼすこと難きに至る、既に靈我の全眞が心我及び體我の上に完全に及ばざるに於ては超我に入ること得て望み得べからず、茲に至りて超我の境に入らんと欲する即ち須らく周圍環境

並に心我自體及び體我自體の爲めに左右され支配さるゝことなきを必要とす、之れを具體的に説明せば自己の周圍環境に如何なる事物現象の生じ來ることありとも、寸毫も之れに依りて心我及び體我を左右されず支配されず、また心我自體及び體我自體に如何なる雜念起り又は感覺生じ來ることありと雖毫厘も之れに依りて左右支配さるゝことなく、却て周圍環境の事物現象を左右支配し、又た心我自體の雜念、體我自體の感覺を左右支配し、是等總ての事物現象、雜念感覺等を全然超越して靈我を發揮顯彰するに至りて始めて超我と稱すべき也。

叙上の如く無我は自己の心我並に體我を離れて絶對、佛神即ち靈我に到らんと欲し、超我は心我並に體我の上に靈我を顯現せんと欲す、即ち無我は靈我を外に覓め、超我は靈我を内より發す、無我は



論

心我並に體我に左右支配さるゝも、超我は心我並に體我を左右し支配す、洵に靈我は外に在らずして内に具存す、之を外に覓めずして内に發して始めて靈我の全眞流露し來り、心我爲めに安く體我爲めに健也、心我安く體我健にして靈我益々其光輝と威力とを顯發するに臻る、而して靈我の光輝と威力とは將ちて人生を導きて至全至眞の境地に到達せしむ、人々須らく無我に遊ぶの迷妄執着を去りて超我に入り其本來の全眞を發揮せよ。

纂

### 太靈道の本義畢



終

